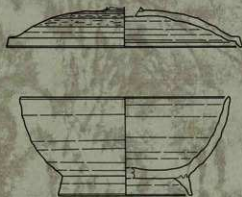


河南町文化財調査報告書 第6集

須江窯跡群

代官山遺跡

——奈良，平安時代の須恵器生産遺跡——



1号窯跡出土土器

平成5年3月

宮城県 河南町教育委員会

須江窯跡群

代官山遺跡

須江窯別群
代官山遺跡



1号窯跡

発 刊 の 辞

須江村(現河南町須江)は、昔から史跡の多いところとして、知られてきました。中心部大半が山という偉か7km²の小さな村でした。

北方佳景山駅に近い糠塚に、統合中学校が建設されましたが、発掘調査の結果、古墳時代の住居跡、平安時代の窯跡が発見されました。奈良～平安時代の窯跡は全山いたるところにあり、中でも瓦山窯跡は有名です。館跡は3ヶ所安永書上に残り、金売吉次の屋敷跡、宿屋敷、神社、葛西氏滅亡時の史蹟、藩政期には百石以上の侍3名、以下の侍10名程の知行地でもあり、須江地区は話題に事欠かないところ です。

代官山という地名が何時から、どういう理由で名付けられたかは、不明です。広淵に代官所があり、代官が居たことはわかりますが、それとの関係で名付けられるようになった(代官の住所地として)のか、はっきりしません。

関ノ入遺跡と山続きであり、4基程の横穴古墳もあり、はっきりとした窯跡も附近に存在します。

斎藤建設株式会社がこの地を土取場とし、約13,000m²の山を切り崩すことになり、協議が持たれ、埋蔵文化財発掘調査を実施することになったものです。

調査の結果、奈良～平安時代の窯跡や住居跡が発見され、中でも奈良時代の窯は采原郡築館町に所在する伊治城跡から出土したものに似ており、古代の流通を通して歴史が明らかにされる発見でありました。

本書は、発掘調査によって明らかにされた発見の永久の保存として、記録に止めるものです。文化財の調査・記録、研究、教育の場に貢献できれば幸いです。

最後に、斎藤建設関係者をはじめ、調査に協力して戴いた多くの方々に深甚の御礼を言上して、発刊の辞とします。

平成5年3月

河南町教育委員会 教育長 浅野 鐵 雄

例 言

1. 本書は、斎藤建設株式会社須江茄子川土砂採取工事に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、次の要項で実施した。
 - 〔遺 跡 名〕代官山遺跡（宮城県遺跡登録番号：69043）
 - 〔所 在 地〕宮城県桃生郡河南町須江ノ茄子川113番地
 - 〔調査対象面積〕13,500㎡
 - 〔発掘調査面積〕11,300㎡
 - 〔調 査 期 間〕平成3年10月2日～平成4年3月31日
 - 〔調 査 主 体〕河南町教育委員会
 - 〔調 査 員〕河南町教育委員会社会教育課主事 中野裕平
河南町教育委員会社会教育課主事 佐藤敏幸
3. 調査指導：宮城県教育庁文化財保護課
4. 発掘調査と報告書作成にあたり、次の方々から指導、協力をいただいた。
 - 宮城県教育庁文化財保護課：菊地進夫、菅安俊典
 - 宮城県多賀城跡調査研究所：村田晃一
 - 菜 館 町 教 育 委 員 会：千葉良彦
 - 福島県本宮町歴史民俗資料館：鈴木雅之
 - 神 奈 川 県 鶴 見 警 察 署：高橋義明
 - 斎 藤 建 設 株 式 有 限 公 司
5. 調査・整理参加者：阿部美栄子、伊藤ゆう子、市川敏子、加藤さわ子、加藤次男、今野親夫、今野はな子、鈴木よみ子、高橋吉雄、高橋正、横瀬千代枝、三浦真太郎、三浦富子
6. 土層や土器の色調表記については『新版標準土色帖』10版（小山・竹原：1990.6、日本色研事業株式会社）に準拠し、土性区分は国際土壌学会法の基準を参考にした。
7. 本調査によって得られた成果の一部は、『第18回古代城柵官衙遺跡検討会』資料等で公表されているが、本書はそれらに優先するものである。
8. 本調査によって得られた資料は全て、河南町教育委員会で保管している。
9. 本書の執筆、編集は河南町教育委員会主事、佐藤敏幸が行った。

目 次

発刊の辞 例言 目次

I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	2
3. 須江窯跡群の概要	8
II. 調査経過	11
1. 調査に至る経過	11
2. 調査の方法と経過	11
III. 基本層序	13
IV. 検出された遺構と出土遺物	14
1. 窯跡	14
1号窯跡・2号窯跡	
2. 住居跡	42
1号住居跡	
3. 竪穴遺構	48
1号竪穴遺構・2号竪穴遺構	
4. 焼土遺構	50
1号焼土遺構・2号焼土遺構・3号焼土遺構・4号焼土遺構・5号焼土遺構・ 6号焼土遺構・7号焼土遺構	
5. 土 塙	54
1号土塙・2号土塙・3号土塙・4号土塙・5号土塙	
6. 溝状遺構	57
7. I層・II層および採集遺物	57
V. 遺構と遺物の検討	59
1. 窯跡と出土遺物	59
2. 住居跡と出土遺物	74
3. その他の遺構と出土遺物	79
VI. ま と め	81
写 真 図 版	84

I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

代官山遺跡は、宮城県桃生郡河南町須江字茄子川に所在する。宮城県の北東部に位置する桃生郡は、7町から構成され、牡鹿半島を囲むように北と南で太平洋に接している。代官山遺跡のある河南町は、面積69.33㎢、人口18,394人の町で、桃生郡の中でも中央に位置し、東に石巻市、桃生郡河北町、西に遠田郡南郷町、南に桃生郡矢本町、北に同郡桃生町、遠田郡涌谷町と境を接している。J R石巻線、一般国道108号線が、町の中央を東西に走り、国道45号線は町の東側を南北に通っている。また、近年、三陸縦貫自動車道も建設される予定である。このように比較的交通機関に恵まれながらも、町域の約52%を水田が占める農村地域である。

北北上川は、町の北端で江合川と合流し、石巻湾に注いでおり、北上川とその支流によって形成された沖積平野と、なだらかな丘陵地が町域となっている。町の西に寛岳丘陵から続く標高150m前後の通称旭山丘陵、北に最高所173mの和親山、東には標高60m前後の通称須江丘陵が配され、町の中央は低平地である。遺跡の位置する須江丘陵は、南北約4.5km、東西約1.3km



第1図 河南町位置図

の南北に長い独立丘陵である。この丘陵には樹枝状に入り込む沢が数多くみられ、その沢に面する斜面に瓦窯や須恵器窯がつくられている。これが須江窯跡群で、その分布は須江丘陵全体に広がっている。須江丘陵は、小竹地区を挟んで大きく南北に二分される。代官山遺跡は、丘陵南部のほぼ中央、東に面する標高約10～50mの斜面に立地している。

遺跡は砂岩、黒色粘板岩、絹状頁岩、花崗岩質岩の礫からなる中新統：迫戸層(佳景山礫岩部層)が基盤をなし、その上に砂岩とシルト岩の互層を主体とする中新統：表沢層、さらに最上部には砂質シルト岩と砂岩の互層を主体として上部に陸成的な粘土質シルト岩が発達している鮮新統：依庭層の地積がみられる(滝沢・神戸・久保ほか：1984.3)。

2. 遺跡の歴史的環境

河南町内では、丘陵及び微高地を中心に多数の遺跡が分布している。ここでは、町内から発見されている遺構や遺物を主として、時代別に概説する。なお、より広い地域で考えなくてはならない時代については、近接地域の資料も用い説明を加えることにした。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、現在のところ町内では発見されていないため、当町におけるこの時代の様相は不明である。

縄文時代

河南町内で縄文時代の遺物を出土する遺跡は19ヶ所を数えるが、このうち年代のわかる縄文土器を出土する遺跡は7ヶ所にすぎない。年代順に列記すると、桑柄貝塚は、カキを主体とする鹹水産貝塚で、縄文時代前期(上川名Ⅱ式)の土器を包含する。関ノ入遺跡では、遺構は検出されていないが、前期(大木2式)、中期(大木7b、8a、8b式)、後期の土器が出土している(中野・佐藤：1990.3、佐藤敏幸：1993.3)。朝日貝塚はヤマトシジミを主体とする汽水産貝塚で、中期(大木7b、8a、8b式)の遺物を包含する(藤沼・小井川ほか：1989.3)。須江藤塚遺跡からは、中期大木9式の土器が出土している(高橋・阿部：1987.3)。宝ヶ峯遺跡は、縄文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標式遺跡として、学史的にも有名である(松本彦七郎：1919.5、1919.9、伊東信雄：1957.3、志間・桑月：1991.11)。ここからは後期(南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式)、晩期(大洞B、BC、C1式)の遺物が出土している。代官山遺跡(佐藤敏幸：本書)、依庭遺跡からは後期(南境式)の土器が出土している。

これらの遺跡はいずれも、丘陵地とその麓部で平地と接する縁辺部に立地している。貝塚や遺跡の立地状況から、丘陵周辺は入海または満潮時には海水が入り込む沼地あるいは湿地で

桃生郡河原町

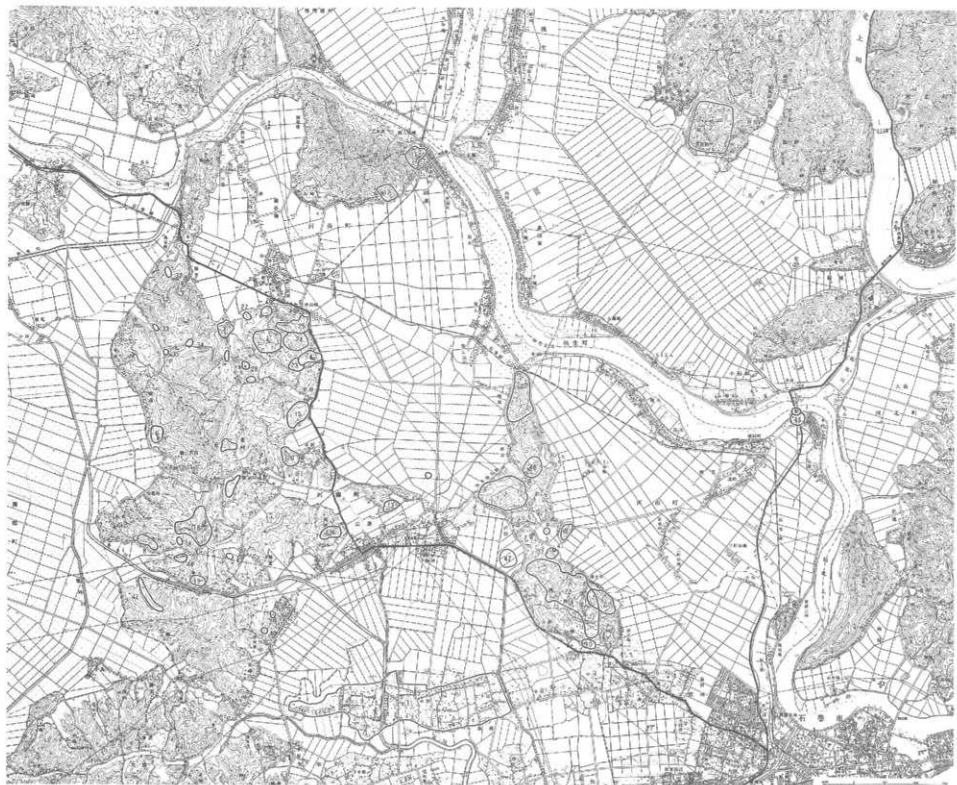
No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	須江懸塚遺跡	集落跡 塚跡	縄文、古墳、奈良、平安、中世	25	前山遺跡	包含地	縄文、奈良、平安
2	須江瓦山窯跡	窯跡	奈良、平安	26	黒沢A遺跡	包含地	縄文、古代
3	池袋洲遺跡	包含地		27	黒沢B遺跡	包含地	縄文、古代
4	広瀬沼遺跡	包含地		28	箱清水A遺跡	包含地	縄文(後)、古代
5	宝ヶ峯遺跡	包含地	縄文(中～晩)	29	箱清水B遺跡	包含地	縄文、古代
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	30	新清水寺脇遺跡	包含地	縄文
7	本廬又遺跡	包含地	弥生	31	小友遺跡	包含地	古代
8	桑柄貝塚	貝塚	縄文(前)	32	高森山遺跡	包含地	古墳、古代
9	坂野田城跡 (坂堂川跡)	城館	中世	33	大沢A遺跡	包含地	縄文、古代
10	宿屋敷跡	城館	中世	34	大沢B遺跡	包含地	縄文
11	栗岩館跡 (船山館)	城館	中世	35	大沢C遺跡	包含地	縄文
12	武田館跡 (武田原敷)	城館	中世、近世	36	夷田館跡	城館	近世
13	柏木館跡	城館		37	代官山遺跡	築跡跡 窯跡	縄文、奈良、平安
14	小崎館跡	城館	近世	38	桑柄遺跡	包含地	古代
15	草田館跡	城館	中世	39	新田A遺跡	包含地	古代
16	高多村館跡 (高地谷跡)	城館	中世	40	新田B遺跡	包含地	古代
17	木村館跡	城館	中世	41	代官山横穴古墳群	横穴 古墳	古墳、古代
18	新庄館跡 (駒立館)	城館	中世	42	群田遺跡	築跡跡	古墳、古代、近世
19	駒場館跡	城館		43	奈良山遺跡	窯跡	古代、江戸
20	依庭遺跡	包含地	縄文(中・後)、 弥生、古代	44	青木館跡 (林光館)	城館	中世
21	長者館跡 (長者平遺跡)	包含地 城館	縄文、奈良、平安、 中世	45	御塩蔵場跡	蔵跡	近世
22	関ノ入遺跡	築跡跡 窯跡	縄文(前・中・後) 奈良、平安、中世	46	細田遺跡	包含地	縄文、奈良・平安
23	小崎遺跡	包含地	縄文、奈良、平安	47	鷺ノ榮遺跡	包含地	古墳
24	太田沢遺跡	包含地	縄文、古代				

桃生郡矢本町

桃生郡蘇生町

①	赤井遺跡	官衙	縄文、奈良、平安	②	桃生城跡	城柵	奈良、平安
---	------	----	----------	---	------	----	-------

第1表 代官山遺跡と周辺の遺跡(地名表)



第2図 代官山遺跡と周辺の遺跡(地図)

(国土地理院 1:25,000を複製)

あったものと思われる。旭山丘陵についてみると、集落及び貝塚を形成していた宝ヶ峯遺跡や桑柄、朝日両貝塚からうかがえるように、この時代の生業である狩猟、採集に適し、長期に亘り生活の可能な地域であったと考えられる。一方、須江丘陵は、須江糠塚遺跡、関ノ入遺跡、代官山遺跡、長者館跡の発掘調査が行われているが、その広大な調査面積にもかかわらず、遺構は検出されず、少量の土器片、石器が出土しているにすぎない。これは、旭山丘陵に比べて地形が起伏に富んでいることや、面積の狭い独立丘陵であることから、あまり生業に適さない環境が1つの要因と考えられる。現在のところ、当時代の遺跡の内容は不明な点が多いが、今後、調査が進むと遺跡の数も増加し、その具体的内容も把握されるものと考えられる。

■ 弥生時代

町内における弥生時代の遺跡は、未だ調査が不十分なこともあって、本鹿又遺跡、依庭遺跡の2遺跡認められているにすぎない。本鹿又遺跡では旧北上川の河床から中期(大泉式)の遺物が出土している。依庭遺跡からは土器は出土していないが、アメリカ式石鏝が採集されている。当町におけるこの時代の遺跡は現在のところ、貧弱であり、今後の調査に期待したい。

■ 古墳時代

古墳時代の遺跡は7遺跡が確認されている。約16,000㎡の発掘調査が行われた須江糠塚遺跡では前期(塩釜式期)の住居跡が7軒検出されている。いずれも方形を基調とするもので、丘陵の尾根上平坦面に立地している。関ノ入遺跡からも同時期の住居跡が1軒検出されている(佐藤敏幸：1993.3)。また、新田A遺跡、鷺ノ巣遺跡から塩釜式期の土器が採集されている。後期では須江代官山に4基の横穴古墳が確認されている。その他に時期は不明であるが、当時代の遺跡に高森山遺跡、群田遺跡がある。

現在まで確認された、これらの遺跡は、丘陵尾根上平坦面に立地するものが多いものの、水田化された低地帯からも確認されていることから、背後の北上川、迫川、江合川を利用した集落の形成及び水田経営が行われていたことが窺える。また、この時期の生業は主として水田経営にあったと思われるが、須江糠塚遺跡第4、第5住居跡から土鏝が多数出土していることから、周辺の河川、湖沼での魚漁や採集も生産活動を補完していたと考えられる。さらに、これらの経済活動を基盤とした首長層や高塚古墳の存在が予想される。

■ 奈良・平安時代

奈良・平安時代になると遺跡数が増加し、現在のところ23遺跡を数える。その殆んどは丘陵上に展開されており、このうち、発掘調査が実施されているのは須江糠塚遺跡、関ノ入遺跡、

須江瓦山窯跡、代官山遺跡、群田遺跡の計5ヶ所である。昭和62年度から継続して調査が行われている関ノ入遺跡では、奈良～平安時代にかけての竪穴住居跡が49軒、8世紀末～10世紀前半にかけての窯跡23基、粘土採掘坑跡6基など多数の遺構が検出されている。また、昭和61年度に調査された須江糠塚遺跡からは奈良時代後半～平安時代初期の竪穴住居跡9軒、9世紀後半～10世紀前半にかけての窯跡6基が検出されている。代官山遺跡からは、8世紀末～9世紀初頭の住居跡1軒、8世紀後半と9世紀後半の窯跡が発見されている。このうち8世紀後半に位置付けられる窯跡で焼成された須恵器の特徴は、栗原郡築館町に所在する伊治城跡から出土した須恵器に近似していることから、本遺跡と密接な関係が予想される(本書)。須江丘陵の中央に位置する瓦山窯跡には、奈良時代の瓦と奈良時代～平安時代の須恵器を生産した窯跡群がある。生産された瓦は古代牡鹿郡衙、あるいは牡鹿跡と推定されている矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木：1987.3)。また、発掘調査によって粘土採掘坑と考えられる土壌群が検出されている。旭山丘陵に位置する群田遺跡の発掘調査では、8世紀末～9世紀代の住居跡3軒などが発見されている。

以上のように須江丘陵は、奈良・平安時代の遺跡が多く、特に、瓦や須恵器生産に関しては丘陵全体を窯跡群として捉えることが可能であろう。さらにその内容から、須江窯跡群は古代牡鹿郡との密接な関係を認めることができる。旭山丘陵では群田遺跡以外は本格的な調査が行われていないため今後の資料増加を待ちたい。

なお、須江窯跡群については次項で概要を記述する。

中世・近世

中世以降になると、旭山や須江の丘陵上など14ヶ所に城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は金亮吉次の仮屋敷跡(藩政期には小島嘉右衛門の除屋敷跡とも言われる)の言い伝えがある。糠塚館跡(須江糠塚遺跡)は、古代の「中山柵跡」に擬定されたこともあり(鈴木省三：1924.12、清水東四郎：1924.12)、「仙台領内古城書上」によれば、東西20間、南北16間の規模で、館主は須藤勘解由左衛門であるとされている(仙台叢書：1971)。塩野田城跡は東西21間、南北27間、館主は須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝えられている。夷田館跡は葛西家家臣夷田氏の居館と伝えられている。多くの館跡は年代、館主共に不明である。また、鹿又地区、須江地区を中心として、町内には、現在のところ86基の板碑が確認されている。紀年銘の判別できるものの中で最古は弘安元年(1278年)、最新は文明10年(1478年)のものである(佐藤雄一：1986.11)。

江戸時代になると、旧北上川や江合川の改修工事や大規模な新田開発が行われている。また、旧北上川を利用したの舟運も盛んになり、本鹿又には御塩蔵が設けられ、桃生、牡鹿、本吉、

気仙の四郡から運送された塩を納庫したとされている（『風上記御用書上』、佐藤敏幸：1992.3、庄司恵一：1992.3）。この時代の遺跡として、一里塚跡、陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡などがある。

3. 須江窯跡群の概要

須江窯跡群の位置する須江丘陵には、布目瓦や須恵器を出土する須江瓦山窯跡など、古くから生産遺跡の所在することが知られていたが、詳細な調査、報告はなされていなかった。この須江丘陵で本格的な発掘調査が始まったのは、昭和56年石巻地方広域水道企業団須江山浄水場建設に伴う長者館跡、および関ノ入遺跡の調査からである。この調査からは古代の集落跡や館跡に関する遺構が検出、発見されたが、瓦や須恵器の窯跡は検出されなかった。窯跡の発掘調査が行われたのは、昭和61年、統合中学校建設に伴う須江糠塚遺跡の調査からである。翌昭和62年から関ノ入地区の大規模開発に伴い関ノ入遺跡の調査が開始され、現在も継続されている。その間、平成3年に須江瓦山窯跡、代官山遺跡の発掘調査が実施されており、須江丘陵の調査総面積は約610,000㎡におよんでいる。しかしながら、発掘調査の記録報告書が刊行されているのは須江糠塚遺跡(高橋・阿部：1987.3)、代官山遺跡(本書)、関ノ入遺跡(佐藤敏幸：1993.3)、須江関ノ入遺跡—工業団地造成に伴う発掘調査概報—(中野・佐藤：1990.3)と二、三の紹介(佐藤敏幸：1991.2、1992.2、村田晃一：1992.8など)があるのみで、約510,000㎡の調査によって須恵器窯19基をはじめ多数の須恵器生産に関する遺構が検出された須江関ノ入遺跡—工業団地、住宅団地造成に伴う調査—の詳細な調査内容は未発表であるという現状にあり、今後、調査成果の公表が期待されている。

北上川、迫川、江合川とその支流によって形成された石巻海岸平野に位置する須江丘陵は、南北約4.5km、東西約1.3km、標高93～3mの南北に長い独立丘陵である。この丘陵には樹枝状に入り込む沢が数多くみられ、その沢に面する斜面に瓦窯や須恵器窯がつくられている。その分布は北上川と接する丘陵北端の糠塚地区から石巻市と境を接する南端の関ノ入地区まで広がっており、丘陵全体が須恵器の生産地であったと考えられる。これが須江窯跡群で、現在まで40余基の窯跡が確認されているが、そのほとんどは発掘調査によって発見されたもので、今後、詳細な分布調査を行えば、その数は100基をはるかに越えるものと予想される。東北地方でも有数の須恵器生産地といえる。

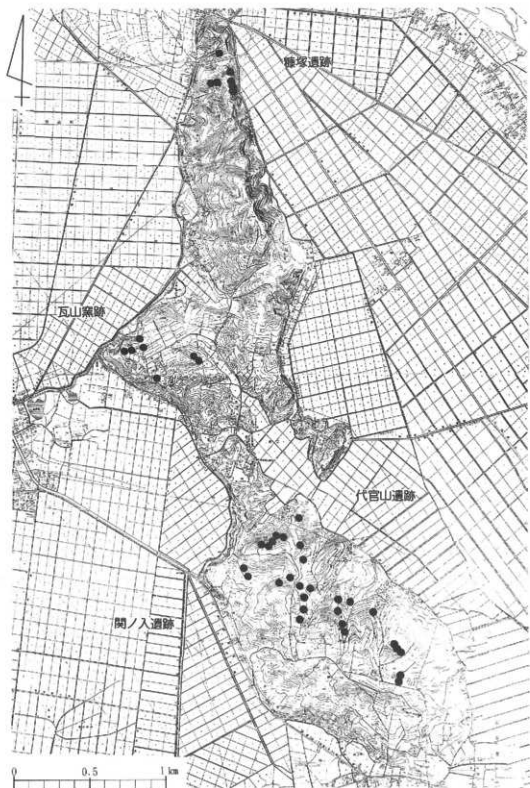
さて、瓦や須恵器の生産技術が須江窯跡群のどこの地域に移入され、展開していったのかは、詳細な分布調査が行われていないため明確ではない。現在、本窯跡群で確認されている最も古い窯跡は、瓦山窯跡と代官山遺跡から発見されている8世紀中葉、あるいはそれをやや下る年代のものである。前者では須恵器と共に平瓦、丸瓦を兼焼しており、古代社鹿郡に関する生産地

としてこの地域から始まったものと推定される。瓦はいずれも、国府多賀城からは出土していないので、宮城県内のこの時期の瓦窯が多賀城と瓦窯周辺の城柵・官衙に供給していることから考えれば特異な窯跡群といえる。後者からは、前者で生産されたものと同じ丸瓦を焼台に転用し須恵器を生産している。この窯の製品と同様の器形、制作技法の須恵器が栗原郡築館町に所在する伊治城跡から出土していることから、密接な関係が推察される(本書)。8世紀後半から9世紀初頭にかけての窯跡は、関ノ入遺跡から検出されている。この時期までは窯跡数も少ない。その数は9世紀から10世紀初頭にかけて急激に増加し、須江丘陵全域に広がっている。その後、10世紀前半には生産活動を終え、中世までは引継がれない。険しい独立丘陵で8世紀中葉から10世紀前半まで連続して採掘していた須江窯跡群は、須恵器や窯形態の移り変わりを捉えることができる好遺跡といえる。

須江窯跡群では、相次ぐ大規模開発に伴い広範な発掘調査が行われた結果、須恵器窯をはじめ多数の須恵器生産に関連する遺構が発見されている。須恵器窯は全部で30基調査されている。そのほとんどは群集せず、一基ずつ散在する傾向にある。関ノ入遺跡の調査では6基の粘土採掘坑跡、粘土槽製に使用したと考えられる土壇群、工人集落などが検出されている。粘土採掘坑跡の形態はトンネル状に掘られたものと、土取り状のものがあり、規模も一定していない。最も保存の良好な5号粘土採掘坑跡は、全長約16m、幅4.5m、深さ4m以上の大規模なものである。このように粘土採取から焼成まで一連の過程が捉えられる遺構が検出され、須恵器生産の具体的様相が明らかになりつつある。

須江窯跡群の周辺には奈良・平安時代の遺跡が多数分布している。城柵・官衙関連の遺跡では、南西約1.2kmに牡鹿柵あるいは牡鹿郡衙の擬定地である矢木町赤井遺跡、北東約4.5kmに桃生城跡が所在する。特に、赤井遺跡は地理的にも近く、瓦の供給関係からも本窯跡群と密接な関係があるものと考えられる。この地方の豪族である。道嶋氏一族は、地盤である牡鹿郡をはじめ桃生郡(桃生城)、小田郡、栗原郡(伊治城)、国府多賀城にも関係の深い一族である。須江窯跡群は古代牡鹿郡に属していたと考えられ、道嶋氏と深い関わりを想わせる。本窯跡群で生産された製品の供給先は、具体的には不明なところが多いが、瓦や須恵器の一部は赤井遺跡に供給されていることが伴明しており、さらに、伊治城のような道嶋氏に關係する遺跡にも供給されていた可能性が考えられる。

今後、調査及び整理がすすむと、当地方での須恵器生産技術の移入と展開、衰退の様相や須恵器生産体制の実態が具体的に明らかにされ、さらに製品の供給関係から牡鹿郡や道嶋氏との関係が理解されるであろう。当地方の古代史を解明していくうえで、重要な遺跡といえる。



第3図 須江丘陵と窯跡の分布

II. 調査経過

1. 調査に至る経過

代官山遺跡の所在する独立丘陵、通称須江山丘陵の南部は石巻市の近郊にあたり、これまでに民間業者などによる農用地等を転用しての小規模開発や、建設事業用の土砂採取工事が行われてきた。また、石巻地方広域水道企業閉による須江山浄水場の建設が行われるなど、石巻圏の都市計画による関連開発の影響がおよぶ地域でもある。

須江山丘陵の南部東端に位置する代官山遺跡は、須江窯跡群内に所在し、岡ノ入遺跡や代官山横穴古墳群に隣接している。このように、代官山遺跡周辺は、遺跡の密集する地域として知られていた。

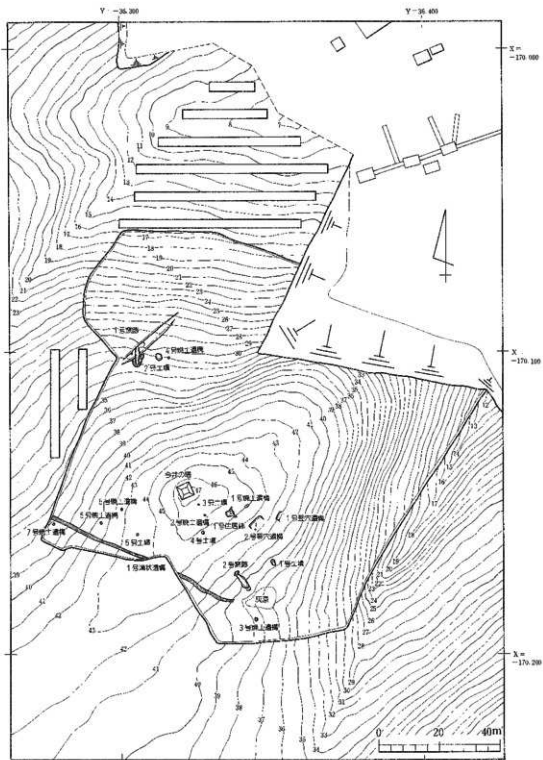
かねてから代官山遺跡隣接地の土砂採取工事を実施していた斎藤建設株式会社から、平成元年12月、新たに代官山遺跡の範囲を含む須江茄子川土砂採取工事実施計画の連絡と関係機関への書類提出があった。連絡を受けた河南町教育委員会では、事業計画の範囲に埋蔵文化財包蔵地である代官山遺跡が含まれるため、事前の協議、および遺跡保存への協力をお願いした。遺跡に含まれない範囲について土砂採取工事が行われていたが、平成3年5月、工事実施計画範囲が、遺跡の範囲を含む旨の連絡があった。連絡を受けた当町教育委員会では、早速現地踏査を実施すると共に、関係諸機関と協議を重ねた。踏査では、事業予定地およびその近接地に須恵器の窯跡が存在することを確認した。協議の結果、諸々の事由から、現状のまま保存することが不可能と判断されたため、河南町教育委員会が主体となって、委託事業として、記録保存を目的とする事前調査を実施することを決め、準備に着手した。

2. 調査の方法と経過

発掘調査は、平成3年9月、調査区全域の杉や雑木の伐採などの調査準備に取りかかった。翌10月2日から重機を用いて抜根と表土除去の作業を開始した。表土の除去は、調査範囲内の比較的狭い丘陵頂部平坦面から開始し、斜面へと拡げていった。丘陵斜面では、踏査で確認されていた窯跡を中心に進め、徐々に範囲を拡張していった。遺構の分布が認められなくなった地域は、幅3mのトレンチを数本設定し、遺構の検出につとめた。

表土除去と平行して、調査区全域の精査を実施し、現場を整備するとともに、正確な遺構数の確認を行った。その結果、須恵器窯跡2基、竪穴住居跡1軒、竪穴遺構2基、焼上遺構7基、土壇3基(その内1基は合口壟棺墓)、溝状遺構1条が検出された。

10月中旬には、表土除去および遺構確認の精査が完了した。その結果、調査対象面積である



第4図 遺構配置図

III. 基本層序

13. 500m²のうち、調査面積は11,300m²におよんだ。

表土除去および遺構確認の精査が完了すると同時に、確認された各遺構の掘り込み、精査を開始した。11月下旬には、北斜面から発見された1号窯跡を除き、各遺遺構の掘り上げ、精査、各種実測図の作成、写真撮影等、一連の作業が完了した。1号窯跡は、北斜面に位置し、写真撮影に手間取る上に、12月初めには積雪、霜の悪条件がかさなり、調査が完了したのは、3月下旬となった。

一方、屋外調査のできない12月中旬～翌3月中旬まで、調査データを整理し、記録報告書作成にあたった。

以上の屋外調査、および室内整理作業は、平成4年3月末日、無事、全て終了し、記録報告書発刊事業を平成4年度に行うこととした。

なお、本調査の基準点は、事業主である斎藤建設株式会社の協力を得て、国家座標に位置付けていただいた。

III. 基本層序

調査区は大きく丘陵頂部平坦面と急斜面に分けられる。これらの各面の層序には多少の相違はあるものの、基本的には同一の層序を示している。

基本層序は次のとおりである。

〔I層〕 褐(10Y R 4/4)色のシルトである。本遺跡の表土で、全域にみられる。粘性はなく、しまりに欠ける。層厚は丘陵頂部平坦面では5～15cm、急斜面では10～40cmである。現況の大部分は雑木林や竹林であり、木の根や竹の地下茎によって擾乱を受けている。少量の縄文土器、土師器、須恵器を含む。

〔II層〕 ぶい黄褐(10Y R 5/4～10Y R 4/3)色のシルトである。調査区全域に分布している。I層より粘性があり、しまりに欠け、礫をまばらに含んでいる。層厚は10～20cmで少量の石器、縄文土器、土師器、須恵器を含む。

〔III層〕 暗褐(7.5Y R 3/4)色のシルトである。調査区南側にある沢状の窪みを中心に分布する。粘性に欠け、しまりもない。層厚は10～30cmで、少量の縄文土器を含む。

〔IV層〕 暗褐(10Y R 3/3)色の砂質シルトである。調査区頂部平坦面から南側斜面に分布する。粘性が強く、かたくしまった土である。層厚10～50cmである。

〔V層〕 黄褐(10Y R 5/6)色の粘土である。全域に分布しており、ほとんどの遺構は木屑上面で確認されている。

IV. 検出された遺構と出土遺物

代官山遺跡の発掘調査によって、須恵器窯跡2基、竪穴住居跡1軒、竪穴遺構2基、焼土遺構7基、土壇5基(合口壟棺墓を含む)、溝条遺構1条の各遺構が検出された。これらの遺構に伴って土師器や須恵器など多数の遺物が出土している。ここでは、検出された遺構と出土遺物に関するデータを、図や表を多用して報告する。

1. 窯 跡

須恵器を焼成した窯跡が2基検出された。それぞれ、1号窯跡は調査区北側の北に面する斜面に、2号窯跡は調査区南側の南東に面する斜面に位置している。いずれも1基ずつ単独で存在し、灰原を伴っていた。

なお、本遺跡の所在する須江窯跡群で検出された須恵器窯には、文章表現が煩雑になることから略称を付して説明することとした。

① 1号窯跡(D A I 1)

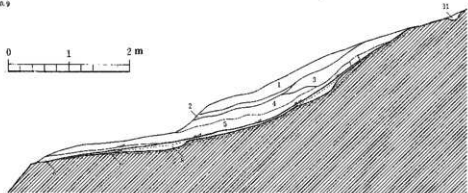
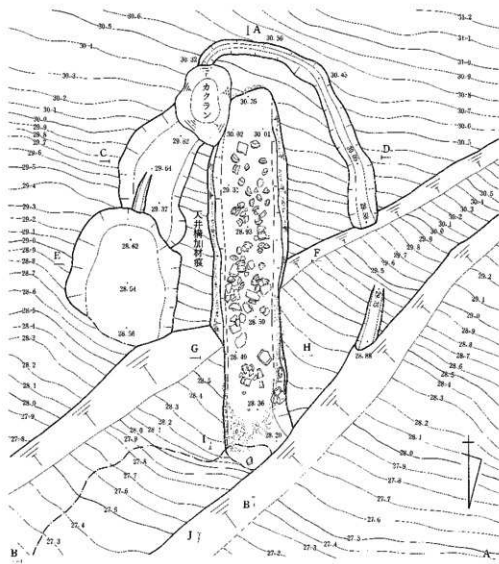
【確認面】基本層序V層から確認された。燃焼部下半と灰原の一部は、工事用作業道によって削平されていた。

【形態】焼成部、燃焼部からなる半地下式の宥窯である。

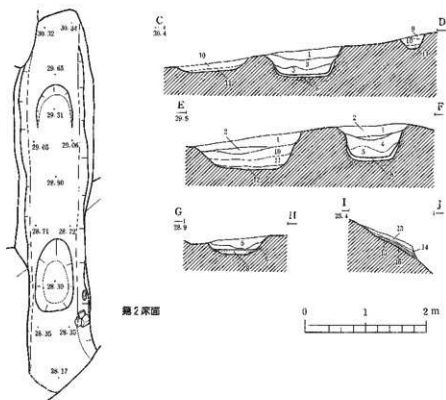
【焼成部】底面の平面形は両側壁が並行し、先端の煙出し付近で緩やかな丸味をもって狭くなる。底面は、概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸味をもっている。燃焼部から煙出しにかけて徐々に傾斜を強めている。傾斜角は 14° ～ 33° ほどである。使用された底面は、2面確認された(確認順に上から第1、第2床面)。第2床面は窯跡掘り方底面である。焼成部中央には長さ66cm、幅59cm、深さ12cmの窪みが認められた。また、焼成部と燃焼部の境には長さ116cm、幅62cm、深さ8cmの舟形が検出された。第1床面は、第2床面上の天井崩落土と考えられる還元土に砂を敷いて整地したものである。側壁は垂直気味に急な角度で立ち上がる。全体に還元し、硬化している。

【燃焼部】焼成部の下方が燃焼部であるが、焼成部と同様の幅で連続しているため、焼成部と燃焼部の境は明瞭でない。底面の平面形は両側壁が並行する長方形で、灰原へと続く。底面は概ね平坦で、焚口に向かってわずかに傾斜している。側壁は垂直気味に急な角度で立ち上がる。全体に還元し、硬化している。

【堆積土】堆積土は2層に大別される。1層(層No1、2、3)は窯跡廃棄後に堆積した自然堆積層である。層No2は灰白色火山灰層である。2層(層No4、5、6)は天井、側壁の崩落土で



第5図 1号窯跡(1)



第2床面

層	土	性	備	考	人	別
1	黒川10Y R2/3	シルト	安濃川10Y R6/6層上を底からブロック状に含む。			
2	灰川10Y R6/1	シルト	灰川色土(灰層)。			自然埋没層
3	江戸川10Y R2/2	粘上質シルト	江戸川10Y R6/6層土を底からブロック状に含む。少量の灰化土、礫土を含む。			
4	明神川10Y R2/2	粘土	礫化土を多量に含む。明神川10Y R6/6層土を底からブロック状に含む。			天然埋没層
5	渡次10H G5/7	粘上	礫土も多量に含む。			天然埋没層
6	渡次10H G6/1	粘土	礫土も多量に含む。			
7	船場1.5Y R5/6	シルト	灰化土を多量に含む。			灰層
8	船場10B G4/1	粘土	船場10B G4/1層を多量に含む。			自然埋没層
9	船場10Y R4/1	シルト質粘土				
10	船場1.5Y R3/6	粘土	少量の礫土を含む。			外周溝
11	船場10Y R4/6	粘土	明神川10Y R6/6層土を底からブロック状に含む。			外周溝付埋没層
12	船場1.5Y R3/3	シルト質粘土	少量の礫土、灰土を含む。			
13	船場10Y R2/2	シルト	多量の礫化物、灰化土、少量の礫土、礫土を含む。			灰層1層
14	船場10Y R5/6	粘土	少量の礫土、礫土を含む。			
15	船場1.5Y R2/2	シルト	多量の礫化物、礫土、礫土を含む。			灰層2層
16	船場10Y R4/1	粘土	少量の礫化物、礫土を含む。			

第3図 1号竪跡②

ある。層No 7は灰層、層No 8は第1床面構築のための整地層である。

〔中軸線の方〕 S-1°-E

〔残存規模〕 全 体——長さ6.14m、 最大幅0.86m、 最大深0.58m

焼成部 -----長さ4.60m、 底幅0.68~0.86m、 残存高0.58m

燃焼部 ——長さ1.54m、底面幅0.74~0.80m、残存高0.14m

〔外周溝〕窯跡の東~南~西の三方を囲むように巡らされている(西側では、削平のため切れており、南東では根による擾乱をうけている)。東端では外周溝付属土壌に接続する。平面形は「U」形をしている。溝の幅23~103cm、深さ8~27cmで残存しており、断面は「U」形である。底面レベルは中央(南)で最も高く、東西両端にすずむにつれて低くなる。堆積土は全て自然堆積層である。

〔外周溝付属土壌〕窯跡東脇に位置し、外周溝東端に接続している。東西1.79m、南北2.22m、深さ75cmの不整隋円形である。堆積土は全て自然堆積層である。

〔構架材〕燃焼部から焼成部にかけて、窯跡東側の側壁外で、窯天井部構築時の骨組みである構架材の痕跡が4ヶ所検出された。径1.5~2.0cmで、2ヶ所で炭化した状態で残存していた。側壁上端から10cm前後外側に位置しており、4点間の間隔は30cm、42cm、42cmである。

〔灰原〕焚口から斜面下方(北東)に広がる灰原が検出されたが、その大部分が工事用作業道によって削平されている。東西約4.00m、南北約2.60mの範囲で残存する。灰層は最も残存する中央で、18cmの厚さである。灰層を除去した後の形態は浅い窪みとして認められた。灰層は、窯跡床面と同様、2層に大別され、多量の遺物を出土した。

〔出土遺物〕窯跡第1床面、第2床面、灰原1層、灰原2層、外周溝付属土壌および各堆積土から、丸瓦、須恵器坏、高台付坏、蓋、甕、壺、鉢の遺物が多数出土した。窯跡内での出土状況は、廃棄後の土砂流入等によって原位置を止めているものは少なく、規則性は認められない。また、窯跡第1床面と第2床面、それぞれに対応すると考えられる灰原1層と2層は、層位的に前後関係として認められるものの、遺物の器種、形態、各器種の量比等の違いは認められない。

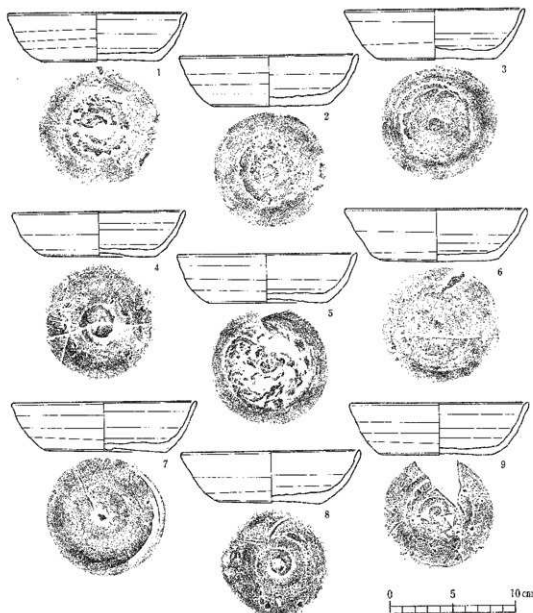
丸瓦(第12図、第13図)

丸瓦は全て破片のみで、完形のものはない。割れ口にも二次的に加熱を受け還元している。また、須恵器片の付着しているものもある。出土量は少ない。第1床面から出土したものは、焼台に使用されている。以上のことから、出土した丸瓦は全て焼台等として転用されたもので、本窯で焼成されたものではないものと考えられる。凸面は縄叩き、凹面は布目を残す無段の丸瓦で、粘土紐積上げ痕が認められる。

須恵器

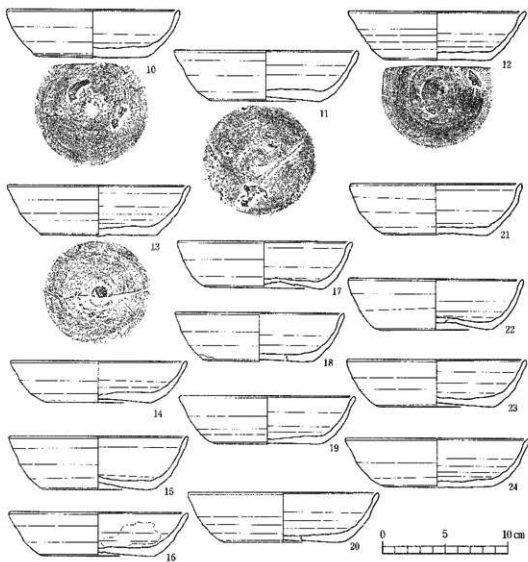
坏(第7~9図、第10図37~41、第11図49、第14~16図、第22図1~3)

坏はその特徴から、I、II、III、IVA、IVB類の5種に分けられる。I類は口径17cm前後、器高6cm前後の大ぶりの橢円形のもので、底部または体部下端から底部全面にケズリ、または回転ケズリ再調整が施される。底部の切り離しのはわかるものは回転ヘラ切りである。器厚の薄い



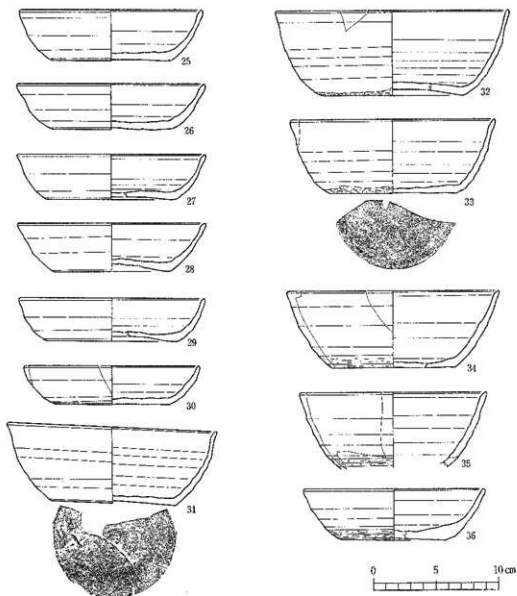
№	類別	層位	外	径	底径	高	口径・底径・高(mm)	分類	備考
1	鉢形器	第1灰層	ロクロナデ、灰白N6/0	縁起へつ切・ナデ	ロクロナデ、灰白N7/0	16.4	9.6・3.9	IVA	
2	浅鉢形器	第1灰層	ロクロナデ、灰白N7/0	四縁へつ切・ナデ	ロクロナデ、色黒外蓋と同じ	14.4	9.3・4.0	IVA	陶磁Ⅱ-C
3	浅鉢形器	第1灰層	ロクロナデ、灰白N6/0	縁起へつ切・ナデ	ロクロナデ、灰白N7/0	14.4	9.6・4.0	IVA	陶磁Ⅱ-C
4	浅鉢形器	第1灰層	ロクロナデ、灰白N7/0	四縁へつ切・ナデ	ロクロナデ、色黒外蓋と同じ	13.9	8.9・4.2	IVA	
5	浅鉢形器	第1灰層	ロクロナデ、灰白N7/0	縁起へつ切・ナデ	ロクロナデ、色黒外蓋と同じ	14.4	9.4・4.0	IVA	
6	浅鉢形器	第1灰層	ロクロナデ、灰白N7/0	四縁へつ切・ナデ	ロクロナデ、色黒外蓋と同じ	14.6	9.5・4.3	IVA	
7	浅鉢形器	第1灰層	ロクロナデ、灰白N7/0	四縁へつ切・ナデ	ロクロナデ、色黒外蓋と同じ	14.9	9.6・4.1	IVA	陶磁Ⅱ-C
8	浅鉢形器	第1灰層	ロクロナデ、灰白N7/0	縁起へつ切・ナデ	ロクロナデ、色黒外蓋と同じ	14.4	8.5・4.2	IVA	
9	浅鉢形器	第1灰層	ロクロナデ、灰白N7/0	四縁へつ切・ナデ	ロクロナデ、色黒外蓋と同じ	14.4	9.0・4.2	IVA	

第7図 1号窯跡出土土器(1)



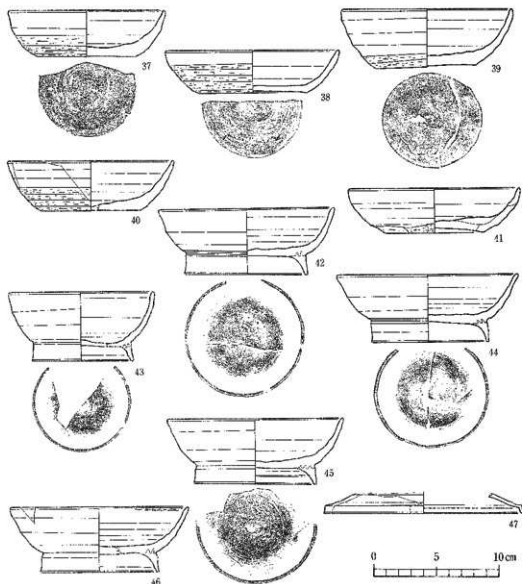
No.	種別	期位	径	高	厚	内径	口徑・底径・高さ(mm)	分類	備考
10	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径N4/8	丸底へつ切	ロクロナテ、色面外周と同径	23.9 × 8.5 × 3.9	IV A		
11	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径7.5Y6/1	丸底へつ切・ナテ	ロクロナテ、色面外周と同径	24.8 × 8.9 × 4.1	IV A		
12	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径R.3Y7/0	丸底へつ切・ナテ	ロクロナテ、色面外周と同径	24.2 × 8.8 × 3.9	IV A		27002-3
13	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径7.5Y6/1	丸底へつ切	ロクロナテ、色面外周と同径	24.6 × 8.7 × 4.0	IV A		
14	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径N5/0	丸底へつ切・ナテ	ロクロナテ、色面外周と同径	24.2 × 8.4 × 3.4	IV A		
15	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径7.5Y6/1	丸底へつ切・ナテ	ロクロナテ、色面外周と同径	24.4 × 9.3 × 4.3	IV A		
16	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径7.5Y6/1	丸底へつ切	ロクロナテ、色面外周と同径	24.4 × 9.0 × 3.5	IV A		
17	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径7.5Y6/2	丸底へつ切	ロクロナテ、色面外周と同径	24.3 × 8.4 × 3.8	IV A		
18	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径O.7Y7/0	丸底へつ切・ナテ	ロクロナテ、色面外周と同径	23.6 × 8.1 × 3.9	IV A		
19	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径C.N7/0	丸底へつ切	ロクロナテ、色面外周と同径	24.2 × 8.6 × 3.9	IV A		
20	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径7.5Y6/1	丸底へつ切・ナテ	ロクロナテ、色面外周と同径	23.8 × 9.6 × 4.0	IV A		
21	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径7.5Y6/1	丸底へつ切	ロクロナテ、色面外周と同径	23.8 × 8.1 × 4.2	IV B		
22	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径7.5Y6/1	丸底へつ切・ナテ	ロクロナテ、色面外周と同径	24.1 × 9.4 × 4.2	IV A		
23	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径C.N7/0	丸底へつ切	ロクロナテ、色面外周と同径	24.5 × 8.2 × 3.8	IV A		
24	深鉢片	第1底面	ロクロナテ、径7.5Y6/1	丸底へつ切・ナテ	ロクロナテ、色面外周と同径	24.8 × 8.5 × 3.9	IV B		

第8図 1号窯跡出土土器(2)



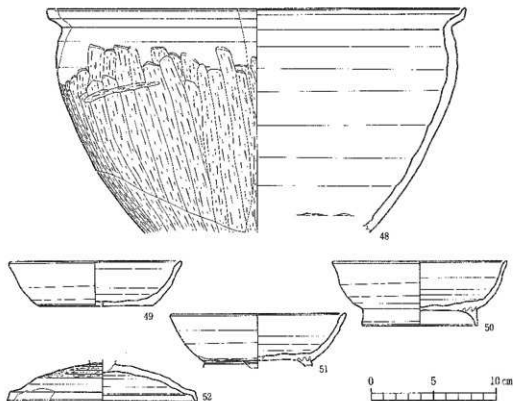
検出	層位	出所	形状	特徴	材質	口徑・高さ・底径(cm)	分類	備考		
25	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰白N7/0	灰白N2/0	コテロナテ	色澤均等と同じ	21.6 × 9.5 × 4.1	IV A	
26	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰白N7/0	西傾へ9度	コテロナテ	色澤均等と同じ	33.2 × 9.4 × 3.7	IV A	25a20-11
27	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰白N7/0	西傾へ9度・無り	コテロナテ	灰白N7/0	15.1 × 10.2 × 3.7	IV A	
28	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰7.5Y6/1	西傾へ9度	コテロナテ	内面外底と同じ	15.1 × 9.5 × 3.8	IV A	
29	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰7.5Y6/1	西傾へ9度	コテロナテ	色澤均等と同じ	14.9 × 10.4 × 3.3	IV A	
30	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰N5/0	西傾へ9度	コテロナテ	色澤均等と同じ	14.1 × 9.9 × 2.3	IV A	
31	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰N5/0	西傾へ9度・無り	コテロナテ	色澤均等と同じ	25.3 × 8.9 × 6.1	I	25a20-14
32	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰N3/0	無り	コテロナテ	色澤均等と同じ	18.8 × 11.0 × 6.8	I	25a20-13
33	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰N5/0	無り	コテロナテ	内面外底と同じ	16.1 × 10.2 × 6.9	I	
34	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰N3/0	西傾へ9度	コテロナテ	色澤均等と同じ	17.1 × 10.8 × 6.2	I	
35	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰7.5Y5/1	西傾へ9度	コテロナテ	色澤均等と同じ	15.0 × 10.0 × 6.2	I	
36	竈跡層	第1層	コテロナテ	灰白N7/0	西傾へ9度	コテロナテ	色澤均等と同じ	14.6 × 9.2 × 4.1	II	

第9図 1号竈跡出土土器(3)



№	種別	形状	出所	調査年	出所	口径・高・厚さ(cm)	分類	備考
37	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、色紙外縁上	12.6・7.9・3.7	Ⅱ	
38	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、底心	14.0・6.6・3.5	Ⅱ	
39	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、色紙外縁上	13.0・6.0・4.8	Ⅱ	
40	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、色紙外縁上	13.4・6.0・4.0	Ⅱ	23-10
41	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、色紙外縁上	13.0・7.8・3.6	Ⅱ	
42	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、色紙外縁上	14.4・9.9・5.4	ⅡC	20-5
43	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、底心	11.0・8.1・3.6	ⅡB	23-10
44	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、色紙外縁上	14.0・9.8・5.4	ⅡB	
45	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、底心	14.2・9.8・3.3	ⅡB	
46	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、底心	14.2・9.8・3.3	ⅡB	
47	深鉢	片断	西蔵朝、西蔵朝、KIN770	西蔵朝	ロタコナ、色紙外縁上	16.0・—・—	ⅡB	

第10図 1号窯跡出土土器(4)



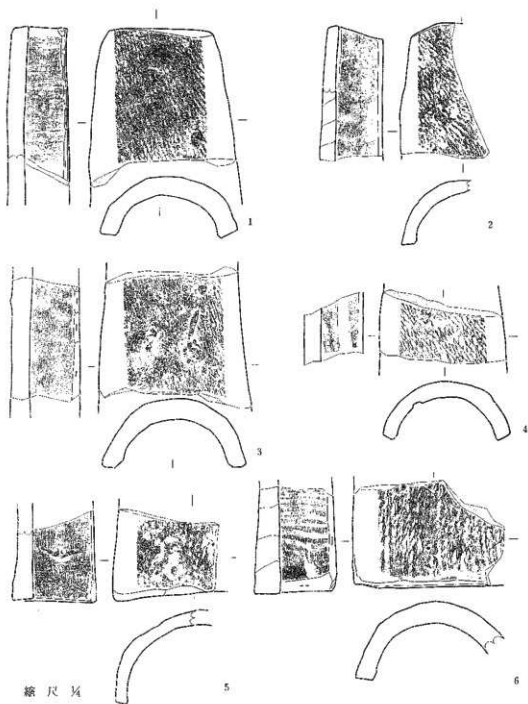
№	種別	器位	作	陶	質	内	色	寸法・重量・器高(㎝)	分類	備考
48	高台付鉢	器2底面	ロクロナダ・直り、灰N5/0			ロクロナダ、灰N6/0	35.8	—		陶版21-6
49	高台付鉢	器2底面	ロクロナダ、灰N4/0	陶版ハナダ・ナダ		ロクロナダ、灰N5/0	18.8・9.3・3.8	IV A		
50	高台付鉢の片	器2底面	ロクロナダ、灰N4/0	ア麻刷り		ロクロナダ、色調外面と同じ	14.0・8.3・5.2	II C	陶版20-6	
51	高台付鉢の片	器2底面	ロクロナダ、灰N2・IV B5/2			ロクロナダ、色調外面と同じ	14.8	—	II B	
52	高台付鉢	器3底面	ロクロナダ・陶版刷り、灰P7・IV 2/2			ロクロナダ、色調外面と同じ	15.2	—	—	

第11図 1号窯跡出土土器⑤

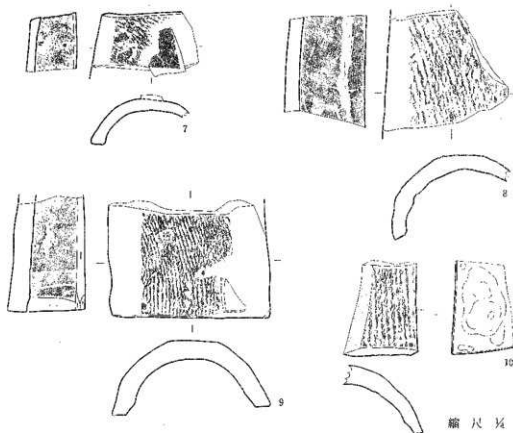
ものもみられる。II類は口径14cm前後、器高4cm前後で、体部が緩く内湾するものである。体部下半から底部全面に回転ケズリ再調整が施される。III類は口径16cm前後、器高4cm前後、底径11cm前後の大ぶりの扁平な器形で、体部は緩く内湾する。底部は回転ヘラ切りで切り離され、軽いナダが施されるものである。IV A類は口径14.5cm前後、器高4cm前後、底径9cm前後で、体部が緩く内湾するものである。底部は回転ヘラ切りで切り離され、軽いナダが施されるものである。IV B類は法量がIV A類と同様で、底部から口縁部にかけて丸をもつて外傾する椀形に近い器形のものである。底部の切り離しもIV A類と同様である。出土量比はIV A類が主体を占める。

高台付鉢(第10図42~46、第11図50、51、第17図、第18図、第22図5)

高台付鉢はI A、I B、II A、II B、II C、III A、III B類の7種に分類される。I類は口径



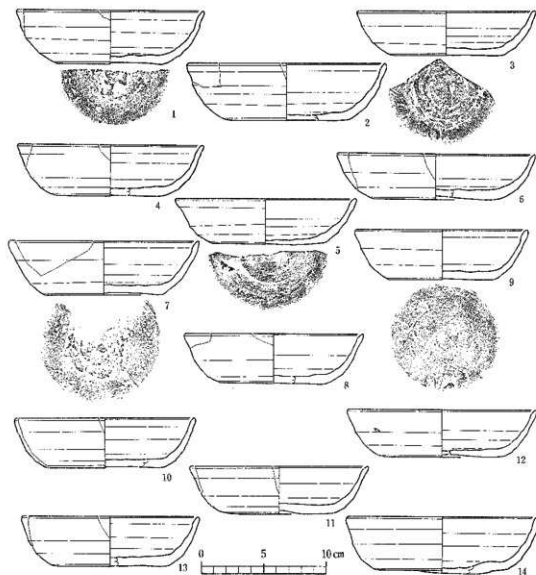
第12圖 1号麻踏出土瓦



No.	種類	器位	出土	出所	備考	No.	種類	器位	出土	出所	備考
7	丸底	第1区埋出	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、裏底K18BG/G1	図版10-7	9	丸底	第1区埋出	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、埴原K18BG/G1	図版10-7
8	丸底	第1区埋出	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、埴原K18BG/G1	7	丸底	表口・脚	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、埴原K18BG/G1		
9	丸底	第1区埋出	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、埴原K18BG/G1	図版10-7	9	丸底	表口・脚	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、埴原K18BG/G1	
10	丸底	第1区埋出	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、埴原K18BG/G1	9	丸底	S3/2層	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、埴原K18BG/G1	7区10-7	
10	丸底	第1区埋出	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、埴原K18BG/G1	10	丸底	S3/2層	高ナタキ・埴原K18BG/G1	表口、埴原K18BG/G1		

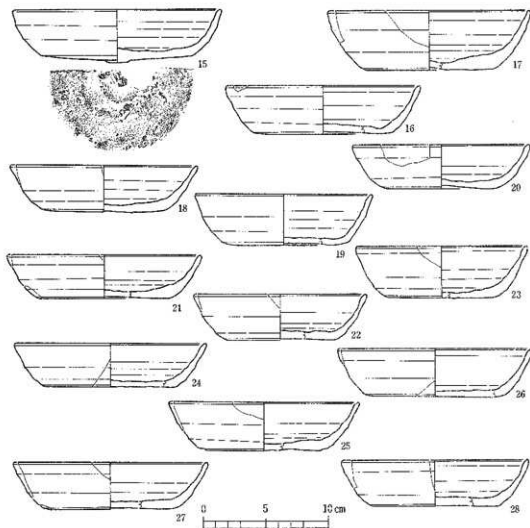
第136圖 1号竈原灰原出土瓦

17cm前後、器高が7.5cm前後の大ぶりで椀形のものである。底部は回転ケズリ再調整が施された後、高台部を付している。体部下端に回転ケズリが施されるものをI A類、施されないものをI B類とした。II類は口径14.4cm前後、器高5.2cm前後のもので、底部は回転ケズリ再調整が施される。体部に回転ケズリの施されるものをII A類、施されないものをII B類、体部が丸く内湾するものをII C類とした。III類は口径12cm前後のもので、器高の低く体部に回転ケズリの施されるものをIII A類、施されないものをIII B類とした。本窯跡から出土した高台付坏の高台部は、坏部に比較するとやや高く、極めて薄くつくられている。また、高台部接合面には、深さ1.5~2.0mmのロクロ回転による同心円状の2条の接合沈線が観察された。



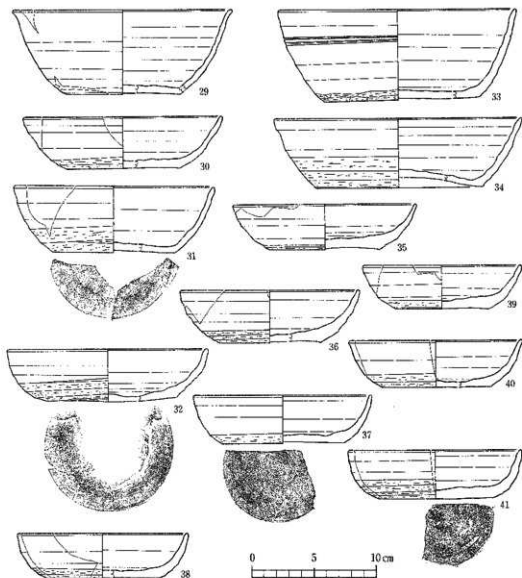
片番号	器名	形状	出所	断面	口径	底径	高さ	口縁・底径・高さ(cm)	分類	備考
16	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY3/1	内縁へろ切・ナテ	コクワナテ、色黒外面と内面	15.0	8.4	4.3	IVB	
21	短筒形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY2/2	内縁へろ切・ナテ	コクワナテ、色黒外面と内面	16.0	9.0	4.6	IVB	
3	短筒形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY3/3	内縁へろ切	コクワナテ、浅緑I SY3/3	14.5	9.0	3.3	IVB	
4	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY3/2	内縁へろ切・ナテ	コクワナテ、焼成I SY4/1	14.9	8.4	4.1	IVB	
5	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY2/1	内縁へろ切・ナテ	コクワナテ、色黒外面と内面	16.5	8.2	3.7	IVB	
6	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY4/1	内縁へろ切・ナテ	コクワナテ、色黒外面と内面	15.8	10.4	3.5	IVB	
7	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY6/1	内縁へろ切・ナテ	コクワナテ、色黒外面と内面	15.2	9.8	4.4	IVB	IVB10-12
8	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY7/1	内縁へろ切	コクワナテ、色黒外面と内面	14.4	8.8	4.6	IVB	
9	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY6/1	内縁へろ切	コクワナテ、色黒外面と内面	13.9	8.5	4.0	IVB	IVB10-12
10	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY7/1	内縁へろ切・ナテ	コクワナテ、色黒外面と内面	14.5	9.3	4.0	IVB	
11	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY4/1	内縁へろ切・ナテ	コクワナテ、色黒外面と内面	14.1	9.0	3.8	IVB	
12	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY3/1	内縁へろ切	コクワナテ、色黒外面と内面	15.2	10.0	3.8	IVB	A1裏面
13	深鉢形片	底面1部	コクワナテ、焼成I SY5/1	内縁へろ切	コクワナテ、色黒外面と内面	11.2	9.6	4.0	IVB	
14	深鉢形片	底面2部	コクワナテ、焼成I SY6/1	内縁へろ切・ナテ	コクワナテ、焼成I SY7/2	13.4	10.6	4.5	IVB	IVB10-12

第14図 1号竈跡灰原出土土器(1)



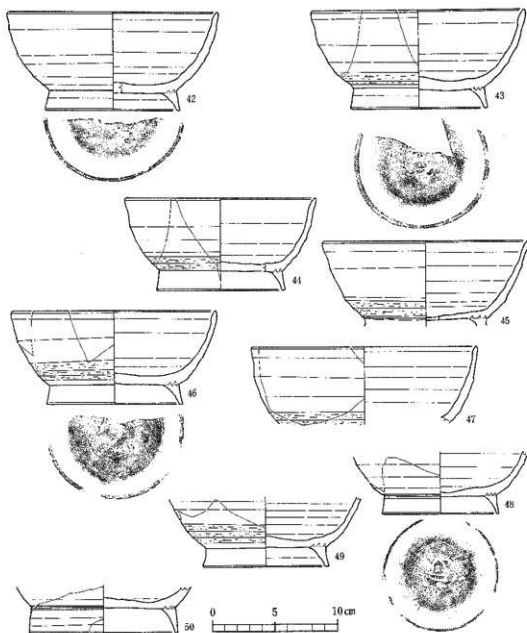
No.	壺 形 類	外 径	口 徑	底 径	高	口 底・底 径・高 (cm)	分 類	出 土 年
15	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 7/1	底径 4 切・ナ	高 5 Y 7/1	16.8・12.2・4.3	III	同図 9-5
16	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 7/2	底径 4 切・ナ	高 5 Y 7/1	15.6・11.3・3.9	III	
17	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 7/1	底径 4 切・ナ	高 5 Y 7/1	16.3・10.2・4.3	III	
18	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 7/1	底径 4 切	高 5 Y 7/1	15.0・9.2・3.8	IV A	
19	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 G Y 5/1	底径 4 切・ナ	高 5 G Y 5/1	14.2・9.6・4.1	IV A	同図 10-6
20	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 7/1	底径 4 切	高 5 Y 7/1	14.2・9.9・3.5	IV A	
21	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 G Y 6/1	底径 4 切	高 5 G Y 6/1	15.6・10.1・3.5	IV A	
22	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 G Y 6/3	底径 4 切・ナ	高 5 G Y 6/3	13.8・9.9・3.7	IV A	同図 10-5
23	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 5/1	底径 4 切・ナ	高 5 Y 5/1	13.8・9.6・4.2	IV A	
24	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 5/1	底径 4 切・ナ	高 5 Y 5/1	15.4・10.6・3.5	IV A	
25	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 G Y 6/1	底径 4 切	高 5 G Y 6/1	15.4・10.8・3.9	IV A	
26	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 7/1	底径 4 切	高 5 Y 7/1	15.6・11.1・3.9	IV A	
27	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 7/2	底径 4 切・ナ	高 5 Y 7/2	15.6・10.8・3.8	IV A	
28	深鉢形	灰土 1 層	口径 5 Y 8/1	底径 4 切・ナ	高 5 Y 8/1	16.0・10.2・3.7	IV A	

第15図 1号窯跡灰原出土土器(2)



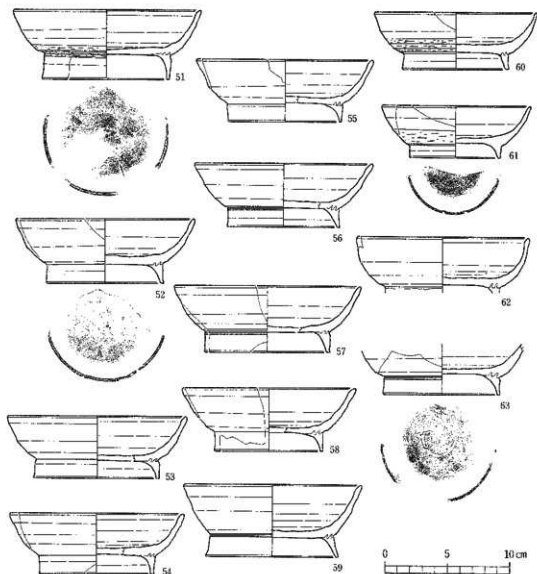
No	類別	部位	外	加色部	内	面	口径・底径・高さ(cm)	分割	備考
29	深鉢類	底	コクロナダ、紅い色土 Y R5/4	無し	コクロナダ、赤褐色土と同じ	17.6・9.0・6.0	I		
30	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、赤褐色土と同じ	18.0・9.0・4.1	II	図版29-19	
31	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、赤褐色土と同じ	16.1・9.0・5.3	II		
32	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、赤褐色土と同じ	16.2・10.4・4.3	II	図版29-17	
33	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R7/1	同色土	コクロナダ、紅い色土 Y R7/2	15.1・12.4・2.4	I	図版29-15	
34	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、赤褐色土と同じ	20.0・13.4・5.6	II		
35	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、赤褐色土と同じ	14.7・8.8・3.6	II		
36	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、赤褐色土と同じ	14.8・8.0・4.2	II		
37	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、紅い色土 Y R6/4	14.2・9.8・3.9	II		
38	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、赤褐色土と同じ	13.7・9.0・3.8	II		
39	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、赤褐色土と同じ	12.8・7.3・3.5	II	図版29-9	
40	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、紅い色土 Y R5/3	14.0・8.8・3.8	II		
41	深鉢類	底	コクロナダ、同色土、灰土 Y R6/1	同色土	コクロナダ、赤褐色土と同じ	14.0・9.3・3.9	II	図版29-18	

第16図 1号窯跡灰痕出土土器(3)



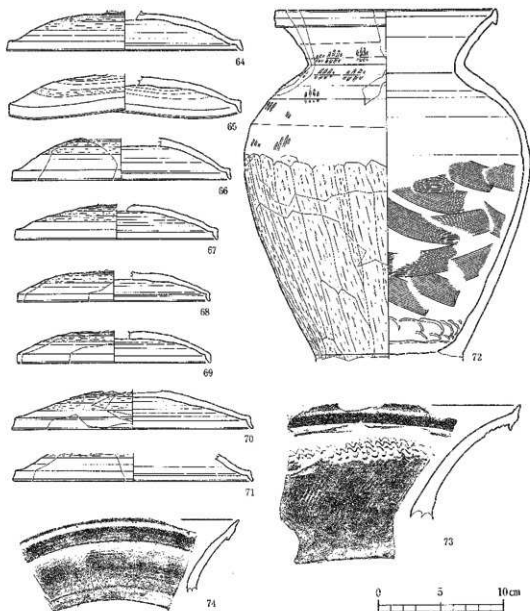
番号	器名	形状	外	内	裏	底	口径・底径・高さ(cm)	分記	備考
42	須弥山式付鉢	灰黒1層	コクロナダ、灰白S Y7/2	黒胎面9	コクロナダ、色釉外側と同じ	17.8 × 10.6 × 7.9	1A	図録40-1	
43	須弥山式付鉢	灰黒1層	コクロナダ、黒胎面9、灰白S Y7/2	黒胎面9	コクロナダ、色釉外側と同じ	17.2 × 11.1 × 7.9	1B		
44	須弥山式付鉢	灰黒1層	コクロナダ、黒胎面9、灰白S Y7/2	黒胎面9	コクロナダ、色釉外側と同じ	15.1 × 10.2 × 7.4	1B		
45	須弥山式付鉢	灰黒1層	コクロナダ、黒胎面9、緑灰10G5/1	黒胎面9	コクロナダ、色釉外側と同じ	16.6 × --- × ---	1B		
46	須弥山式付鉢	灰黒1層	コクロナダ、黒胎面9、灰白S Y7/2	黒胎面9	コクロナダ、色釉外側と同じ	16.6 × 10.8 × 7.5	1B	図録40-2	
47	須弥山式付鉢	灰黒1層	コクロナダ、黒胎面9、灰白S Y7/2	黒胎面9	コクロナダ、色釉外側と同じ	16.2 × --- × ---	1B		
48	須弥山式付鉢	灰黒1層	コクロナダ、灰白S Y7/2	黒胎面9	コクロナダ、色釉外側と同じ	--- × 9.4 × ---	1A		
49	須弥山式付鉢	灰黒1層	コクロナダ、黒胎面9、灰白S Y7/2	黒胎面9	コクロナダ、色釉外側と同じ	--- × 10.1 × ---	1B		
50	須弥山式付鉢	灰黒1層	コクロナダ、緑灰10G5/1	黒胎面9	コクロナダ、灰白S Y7/2	--- × 17.0 × ---	1A		

第17図 1号灰罎灰原出土土器(4)



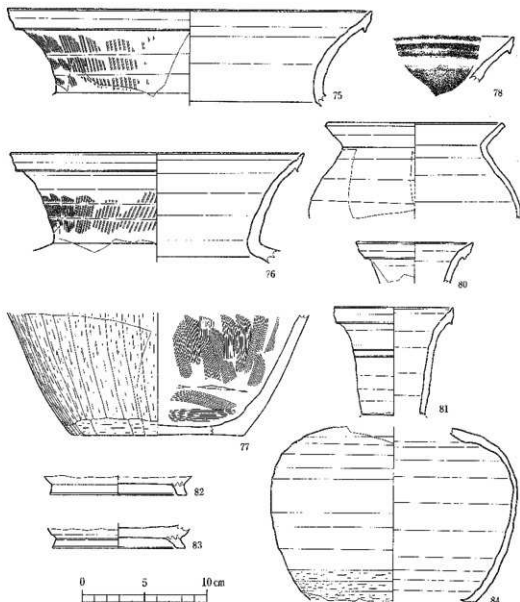
No.	場所	層位	形	底径	口径	高さ	備	1径・底径・高さ(cm)	分類	図
51	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ・藍転刷り	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ5.4	内転刷り	11.1・10.2・5.4	IIA	図20-4
52	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ5.2	内転刷り	14.4・9.8・5.2	II B	
53	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ5.0	内転刷り	14.4・10.1・5.0	II B	図20-7
54	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ4.6	内転刷り	14.0・9.2・4.6	II B	
55	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ5.0	内転刷り	14.2・9.1・5.0	II B	
56	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ5.1	内転刷り	14.3・8.8・5.1	II B	図20-8
57	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ5.3	内転刷り	15.0・10.1・5.3	II B	
58	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ5.2	内転刷り	14.0・8.7・5.2	II B	
59	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ5.8	内転刷り	14.3・10.0・5.8	II B	
60	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ・藍転刷り	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ4.6	内転刷り	15.0・8.6・4.6	IIA	図20-2
61	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ4.2	内転刷り	11.0・7.3・4.2	IIA	
62	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ5.1	内転刷り	13.8・	II C	
63	溝原跡高台付坪	灰層1層	ロクロナデ	底径10.5/6.1	口径10.0	高さ4.4	内転刷り	14.0・9.4・	II C	

第18図 1号窯跡灰原出土土器(5)



施設名	層位	外	内	径 (cm)	高さ
64 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	19.0	約高20-25
65 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	19.5	約高20-25
66 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	17.5	—
67 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。4フープ径36.5/6	ロクロナデ、色澤外側と同じ	26.3	約高20-25
68 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	33.4	—
69 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	32.6	—
70 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	39.4	約高20-25
71 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	19.2	—
72 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	28.0	—
73 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	—	約高20-25
74 赤土製	灰層1層	ロクロナデ・細孔有り。表10Y6/1	ロクロナデ、色澤外側と同じ	—	—

第19図 1号窯跡灰原出土土器(6)



No.	種別	部位	文	色	形	内	口縁	口径・底径 (cm)	備考
75	須恵窯跡	灰皿1層	ワタロナダ・タタキ。にふい・赤褐色 Y R3/3	---	---	---	ワタロナダ、色面外縁と同じ	28.3・---	図版21-1
76	須恵窯跡	灰皿2層	ワタロナダ・タタキ。にふい・赤褐色 Y R2/3	---	---	---	ワタロナダ、色面外縁と同じ	23.6・---	図版21-2
77	須恵窯跡	灰皿1層	ワタロナダ、厚26/9	---	---	---	ワタロナダ、色面外縁と同じ	---	---
78	須恵窯跡	灰皿1層	面9、底3M7/2	青	---	---	ナダ、底N4/9	---	23.8
79	須恵窯跡	灰皿1層	ワタロナダ、赤褐色 Y R4/3	---	---	---	ワタロナダ、色面外縁と同じ	14.4・---	図版20-17
80	須恵窯跡	灰皿1層	ワタロナダ、底7 Y R4/1	---	---	---	ワタロナダ、色面外縁と同じ	9.2・---	図版20-16
81	須恵窯跡	灰皿1層	ワタロナダ・底緑、底7.5 Y 6/2	---	---	---	ワタロナダ、色面外縁と同じ	9.6・---	---
82	須恵窯跡	灰皿1層	ワタロナダ、底緑2層、底N4/9	---	---	---	ワタロナダ、色面外縁と同じ	---	---
83	須恵窯跡	灰皿1層	ワタロナダ、底緑2層 Y R3/2	---	---	---	底縁青り・ワタロナダ	---	19.6
84	須恵窯跡	灰皿1層	ワタロナダ、赤褐色 Y R3/3	---	---	---	ワタロナダ、色面外縁と同じ	---	19.9

第208図 1号窯跡灰原出土土器(7)

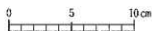
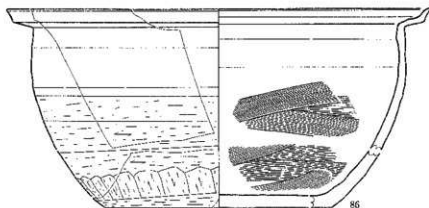
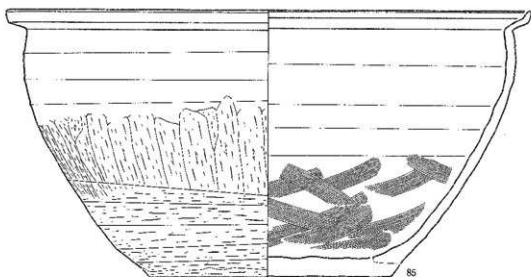
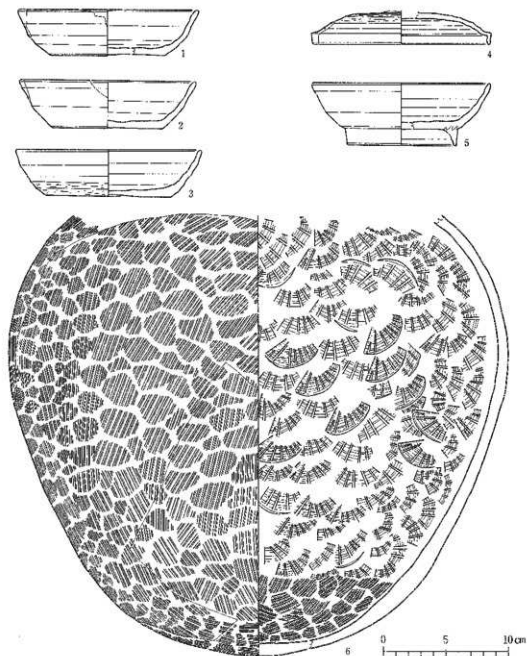


図	編	器	外	内	底	口	口径・底径・高さ(cm)	備
25	須恵器群	灰室1層	ロクロナデ・細粒刷り・刷り、じさい厚塗S Y 2/3	——	ロクロナデ・ナデ、内面外周と同	45.0・18.2・21.0	30編21-5	
85	須恵器群	灰室1層	ロクロナデ・細粒刷り・刷り、刷りY 6/7	細粒刷り	ロクロナデ・ナデ、内面外周と同	56.0・18.0・16.0	——	
87	須恵器群	灰室1層	ロクロナデ・細粒刷り、じさい厚塗S Y 2/3	——	ロクロナデ、内面外周と同	32.0・——	——	

第21区 1号窯跡灰原出土土器(8)



No.	種別	位置	外	形	底	内	高	口径・底径・高(単位cm)	分類	備考
1	高巻鉢片	埋No11	ワタナダ	穴径5.5V2	底面ヘラ切	ワタナダ	色焼片破じ可	14.8 × 9.0 × 3.6	IV A	
2	知恵輪片	埋No11	ワタナダ	穴径7.3V2	底面ヘラ切	ワタナダ	色焼片破じ可	14.5 × 9.1 × 3.7	IV A	
3	浅鉢片	埋No11	ワタナダ	穴径10.0	底面削り	ワタナダ	色焼片破じ可	15.3 × 9.9 × 3.8	II	
4	知恵輪蓋	埋No11	ワタナダ	穴径10.0	底面削り	ワタナダ	色焼片破じ可	14.3 × - × -		
5	浅鉢蓋高台(片)	埋No17	ワタナダ	穴径7.5V2	底面削り	ワタナダ	色焼片破じ可	14.5 × 7.7 × 5.9	IV B	
6	知恵輪	埋No12	タナ	穴径15.0V2	アタキ	ワタナダ	色焼片破じ可	----- × ----- × 20.7		埋No12・4

図222 1号塚跡外周溝付竪土横出土土器

蓋(第10図47、第11図52、第19図64~71、第22図4)

蓋は坏蓋のみが出土しているが、つまみ部が全て欠失しているため不明である。高台付坏I類、II類と組み合わせるもの出土している。罫形は体部が直線的に外傾し口縁部が屈曲するものと、体部が緩く内湾するものがある。器面は天井部中位まで回転ケズリ再調整が施される。つまみ部接合面にも接合沈線が観察された。

甕、壺(第19図72~74、第20図、第22図6)

甕は全容のわかるものはない。丸底、平底のものがあるが、後者が主体を占める。口縁部は丁寧につくりあげられ、ロクロ回転による波状沈線の施されるものもある。体部はロクロナデ、タタキ、回転ケズリ、ケズリが並用される。

壺も全容のわかるものはない。口頸部が細長く、口縁部は甕と同じ形態を呈する。頸部中に沈線のめぐらされるものもある。体部は比較的縦長で、上半にロクロナデ、下半に回転ケズリ再調整が施される。底部は回転ケズリ再調整が施された後、高台が付される。高台部の接合面には、高台付坏と同様に、深さ1.5~2.0mmのロクロ回転による3条の接合沈線が観察される。

鉢(第11図48、第21図85~87)

鉢は底部から緩い膨みをもって体部が外傾し、短い口縁部が受口状に広がっている。体部は外面にロクロナデ、下半に回転ケズリとケズリが並用される。内面はロクロナデと横方向のヘラナデ、またはナデが認められる。底部は回転ケズリが施される。

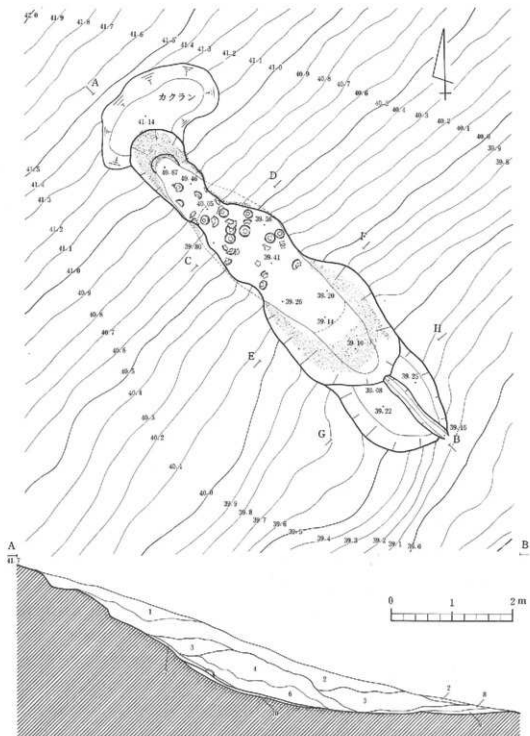
■ 2号窯跡(D A I 2)

【確認面】基本層序V層から確認された。

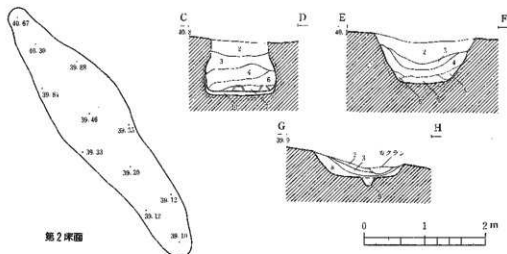
【形態】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる地下式の窯である。

【煙道部】先端に位置し、平面形は歪んだ円形をしている。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。底面には炭火材が認められた。

【焼成部】底面の平面形は煙道部に近づくにつれて、緩やかな丸味をもって徐々に狭くなり、先端は丸くおさまる煙道部底面となる。底面は、概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸みもっている。また、罫や須恵器片を焼台にしている。燃焼部から焼成部にかけて徐々に傾斜を強めている。傾斜角は24°~31°ほどである。使用された底面は2面確認された(確認順に、上から第1、第2床面)。第2床面は窯跡掘り方底面である。第1床面は窯跡廃棄時の床面で、第2床面焼成部下半から燃成部上半にかけて細かい崩落土に砂を敷いて整地している。側壁は内湾気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と天井の境は明瞭ではない。側壁には、窯跡掘り方の工具痕が認められた。全体に還元し、硬化している。



第23図 2号窟跡(1)



No.	土 名	土質	備 考	大 小
1	黒褐色5Y R2/2	シルト	焼灰の炭化物・灰土を含む。	
2	黒褐色10Y R2/3	シルト	少量の炭化物・灰土を含む。	窯内堆積物
3	灰白色10Y R8/1	シルト	灰白色火山灰層。	
4	暗赤褐色5Y R5/6	粘 土	少量の焼灰土を含む。	
5	暗赤褐色5Y R5/8	粘 土	多量の焼灰土を含む。	天井・側壁崩落物
6	黄灰10B G4/1	粘 土	多量の酸化土をブロック状に含む。	
7	暗10Y R4/4	粘 土	多量の焼灰土をブロック状に粗かく含む。	自然堆積物
8	灰5Y R1-7/1	シルト	少量の炭土を含む。多量の炭化物・炭灰土を含む。	灰層
9	暗10Y R4/1	シルト	少量の炭土を含む。少量の炭化物を含む。	灰層
10	暗黄灰10B G4/1	粘 土	取土土を含む。	穴的敷地盤

第24図 2号窯跡②

【焼成部】 焼成部からくびれて狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は、概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。全体に還元し硬化している。

【前庭部】 燃焼部の下方に掘り方と溝からなる前庭部が検出された。燃焼部に接続し平面形は「U形」である。底面は概ね平坦で、側壁はだらだらと立ち上がる。横断面は「~」形である。底面中央には、燃焼部に接続し窯跡外に延びる溝が検出された。長さ1.44m、幅12~21cm、深さ4~10cmである。底面レベルは燃焼部側が高く、斜面下方にすすむにつれて低くなる。

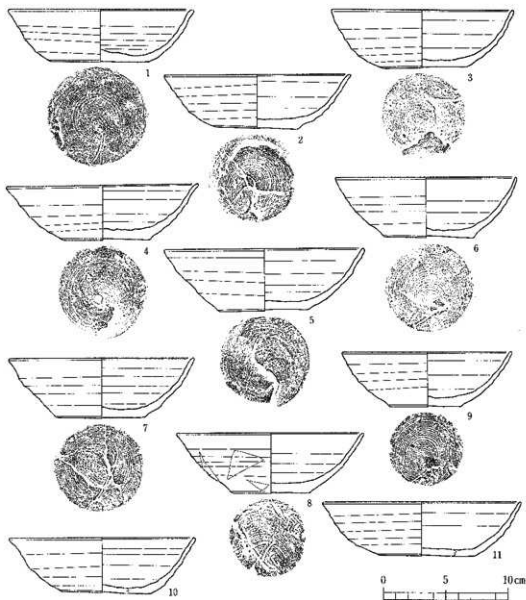
【堆積土】 堆積土は3層に大別される。1層(層No. 1、2、3)は自然堆積層で、天井崩落後に堆積したものである。層No. 3は灰白色火山灰層である。2層(層No. 4、5、6)は天井、側壁の崩落土である。3層(層No. 7)は窯廃棄から天井崩落までに煙道から流入した自然堆積土である。層No. 8は灰層である。層No. 10は床面構築土である。

【中軸線の方角】 N-44°-W

【残存規模】 全 体 ----- 長さ7.10m、 最大幅1.22m、 最大深0.86m

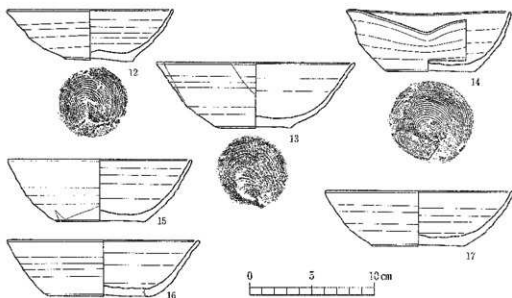
煙道部 ----- 長さ0.82m、 底面積0.34~0.36m、 残存高0.41m

焼成部 ----- 長さ3.20m、 底面積0.36~1.22m、 残存高0.86m



No	種別	胎位	外	底	点	形	器	1径・底径・胎高(cm)	備考
1	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周に同色	18.9・7.7・4.2	図版22-4	
2	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	15.6・5.5・4.4	図版22-1	
3	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	14.4・6.6・4.7	図版22-3	
4	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	15.4・7.6・5.6	図版22-6	
5	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	16.6・7.6・4.6		
6	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N6/8	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	11.4・7.1・4.9	図版22-10	
7	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	14.9・7.0・4.8	図版22-2	
8	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	12.7・6.4・4.8		
9	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	13.7・5.6・4.4		
10	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	15.5・7.1・4.6		
11	磁器鉢	第1底面	ワタコナデ、灰化N7/9	ワタコナデ	ワタコナデ	色釉外周と同色	15.9・7.6・4.4		

第25図 2号窯跡出土土器(1)



No	種別	器名	外 径	口 径	底 径	高	口厚・底厚・脚高(cm)	備 考
12	須恵器 灰	第1号器	ロケツナデ、底径N50	正転み切	ロケツナデ、底縁部直上側	13.4 × 5.2 × 4.1		
13	須恵器 灰	第2号器	ロケツナデ、底径N70	正転み切	ロケツナデ、底縁部直上側	16.9 × 5.6 × 5.2		
14	須恵器 灰	第1号器	ロケツナデ、底径N50	反転み切	ロケツナデ、底縁部直上側	13.2 × 6.3 × 4.9	26022-8	
15	須恵器 灰	第1号器	ロケツナデ、オリブ径2.3G Y4/5	正転み切	ロケツナデ、底縁部直上側	15.6 × 8.0 × 4.6		26022-9
16	須恵器 灰	第2号器	ロケツナデ、底径N50	反転み切	ロケツナデ、底縁部直上側	14.2 × 7.0 × 5.0		
17	須恵器 灰	第1号器	ロケツナデ、底径N50	正転み切	ロケツナデ、底縁部直上側	15.2 × 7.2 × 4.5		26022-9

第26図 2号須恵器出土土器(2)

焼成部 ——— 長さ1.68m、 底面幅0.40~0.74m、 残存高0.69m

前庭部 ——— 長さ1.40m、 底面幅0.30~1.04m、 残存高0.28m

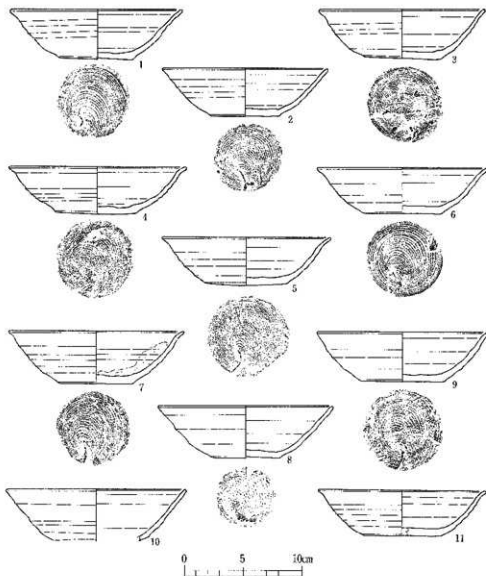
〔灰層〕空罌の斜面下方から灰原が検出された。灰原は空罌から2.00m離れて下方に位置し、長軸10.40m、短軸7.60mの不整形の範囲に広がっていた。灰層は単層で、最も厚い中央で、25cm堆積している。多数の遺物を包含していた。

〔出土遺物〕発跡第1床面、第2床面、灰原1層および空罌堆積土から須恵器坏、甕、壺の遺物が多数出土した。第1床面から出土した坏は、そのほとんどが伏せた状態で検出された。灰原1層の出土状況に規則性は認められない。出土遺物の量比は、坏が主体を占めている。第1床面、第2床面、灰原1層から出土した遺物は、器形、技法、法量等の違いは認められないことから、全体を一つのまとまりと考えておく。

須恵器

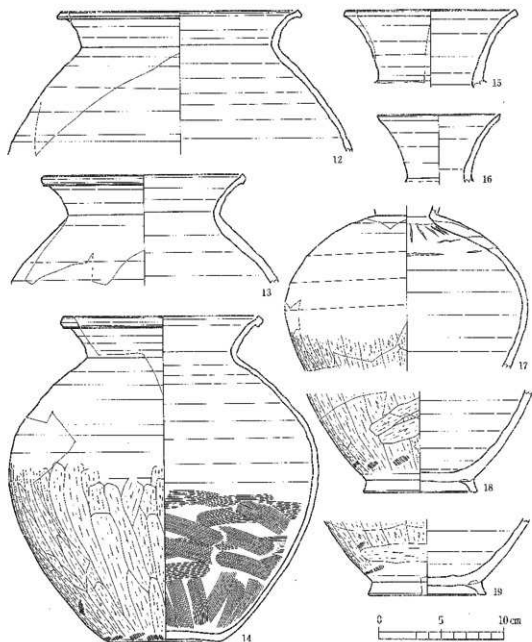
坏(第25図~27図)

体部全体が弱い丸味を持って外傾するもので、口縁部が外反するものと、しないものがある。底部は回転系切りで切り離され、再調整は施されない。口縁部を片口状に曲げた器形のものも



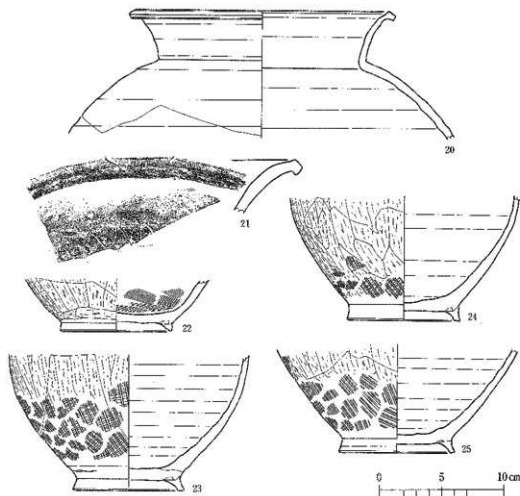
番号	種別	形状	出所	底径	内径	口径・口径・胴高(cm)	備考
1	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白N7/0	黒釉赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	14.7・6.3・4.4	
2	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白N7/0	黒釉赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	14.2・5.0・4.1	
3	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白N7/0	黒釉赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	14.2・6.0・4.3	
4	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白N7/0	黒釉赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	15.3・6.0・4.1	図録22-1
5	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白N7/0	黒釉赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	14.4・7.1・4.1	
6	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白N7/0	黒釉赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	14.0・6.5・3.9	
7	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、黄白S B6/L	赤彩赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	15.0・6.2・4.5	
8	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白N7/0	赤彩赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	15.0・5.6・4.5	
9	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白N7/0	赤彩赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	14.6・7.0・4.2	
10	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白S B6-L/4	赤彩赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	15.3・	
11	灰窯跡	灰窯1層	ロタロナテ、灰白N7/0	黒釉赤彩	ロタロナテ、色紙外縁と内縁	14.2・6.5・3.9	

第27図 2号窯跡灰窯出土土器(1)



No.	種類	層位	形	容	容量	内	画	口径・底径・高さ・体積(%)	備考
12	深鉢形壺	灰層1層	コクロナギ, 高さ57R/1	---	---	コクロナギ, 色黒内面と同じ	13.9	---	---
13	深鉢形壺	灰層1層	ワタロナギ, 高さ56/0	---	---	ワタロナギ, 色黒内面と同じ	16.4	---	図版27-16
14	広口形壺	灰層1層	コクロナギ・タタキ・黒り, 高さ6/0	光澤	---	ワタロナギ・イデ, 色黒内面と同じ	16.2	4.9・26.0・15.4	---
15	浅鉢形壺	灰層1層	ワタロナギ, 高さ7/0	---	---	ワタロナギ, 色黒内面と同じ	13.9	---	---
16	深鉢形壺	灰層1層	ワタロナギ, 高さ5/0	---	---	ワタロナギ, 色黒内面と同じ	9.5	---	図版27-11
17	深鉢形壺	灰層1層	ワタロナギ・黒り, 高さ7/0	---	---	ワタロナギ・オキエム, 色黒内面と同じ	---	---	図版27-17
18	浅鉢形壺	灰層1層	ワタロナギ・タタキ・黒り, 高さ6/0	---	---	ワタロナギ, 色黒内面と同じ	---	---	図版27-14
19	深鉢形壺	灰層1層	ワタロナギ・タタキ・黒り, 高さ5/0	---	---	ワタロナギ, 高さ5/0	---	---	---

第28図 2号塚跡灰原出土土器(2)



No.	種別	料色	形	器	底	内	面	口径・底径・器高・器口厚(cm)	備考
20	広縁鉢	灰黒土層	ロクロナデ	灰N5/9	---	ロクロナデ、赤褐色土層に等じ	21.4	---	図録22-17
21	引型鉢	灰黒土層	ロクロナデ	山形灰褐色土、灰N5/9	---	ロクロナデ、色味外縁に等じ	---	---	---
22	丸型鉢	灰黒土層	ロクロナデ	内面N7/9	---	ロクロナデナデ、色味内縁に等じ	---	8.6	---
23	深縁鉢	灰黒土層	ロクロナデ	ツツキ・繋り、灰N5/9	---	ロクロナデ	---	8.6	図録22-15
24	丸縁鉢	灰黒土層	ロクロナデ	ツツキ・繋り、灰N5/9	---	ロクロナデ、色味外縁に等じ	---	9.0	図録22-15
25	深縁鉢	灰黒土層	ロクロナデ	ツツキ・繋り、灰N5/9	---	ロクロナデ、色味外縁に等じ	---	9.2	図録22-13

第28図 2号窯跡灰原出土土器(3)

ある(第26図14)。器面調整は、外面に指によるロクロナデ、内面にコテ状工具によるロクロナデが観察される。口径13.4~16.0cm(平均14.9cm)、底径5.4~8.0cm(平均6.7cm)、器高3.9~5.2cm(平均4.4cm)を計る。口径に対する底径の比は1:0.45で、口径に対する器高の比は1:0.30である。

甕(第28図12~14、第29図20、21)

甕は出土量が少なく、全容のわかるものは少ない。底部は平底で、体部は球形に近い丸味を

もつもので、短い口縁部が、直線的に外傾する。口唇部は折り曲げられ、つくりも丁寧であるが、比較的小さく、単純化している。器面は口縁部から体部中位までロクロナデ、下半に縦方向のケズリが施され、前工程のタタキメも観察される。内面は上半にロクロナデ、下半に横方向と縦方向のナデが施されている。口縁部に連続山形沈線文の見られるものもある。

壺(第28図15~19、第29図22~25)

壺も全容のわかるものはない。口縁部は短めで、頸部から口縁にかけて緩やかに外反する。体部はナデ屑の球形で、底部にはしっかりと外側にふんばる高台が付く。器面は体部中位より上にロクロナデ、下半にケズリとタタキメが残る。内面はロクロナデが全域に施される。高台部には底縁端屈曲点に付されており、接合面には角柱状の棒状工具による刺突を施し、凹凸をつくり、接着を強化している。

2. 住居跡

■ 1号住居跡 ■

〔確認面〕基本層序IV層から確認された。住居跡の北側は木の根によって大きく攪乱されている。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕南北2.16~1.48m、東西2.51mのやや台形状の長方形である。

〔竪穴層位〕竪穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序IV層、V層からなり、最も保存の良い北西隅では41cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序V層を床面としており、凹凸はない。底面レベルはほぼ水平である。全体的にかたい。住居跡北辺中央から南東隅に向って走る溝が検出された。幅10~17cm、深さ5cm前後である。南東隅で周溝と接続し、外延溝へと続く。

〔柱穴〕検出されなかった。

〔カマド〕北東隅に位置しており、燃焼部、煙道部が検出された。燃焼部は奥行き50cm、幅55cmである。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙道部は長さ84cm、幅20cm、底面はほぼ水平である。先端からは煙出しピットが検出された。

〔周溝〕住居北壁下、西壁下と南壁下の一部から検出された。幅8~20cm、深さ3~14cm断面は「U形」である。底面レベルは北壁下で最も高く、南東隅に近づくにつれて低くなり、外延溝に接続する。

〔外延溝〕住居南東隅から住居外縁斜面(南東)に向ってのびる。長さ1.66m、幅22cm、断面は「U」形である。住居から離れるにつれて底面レベルは低くなる。

【出土遺物】住居跡床面、カマド床面および堆積土から土師器甕、甔、須恵器坏、甕、壺、赤焼き土器坏が出土した。

土師器

甕(第31図5、6、第32図7~9)

甕は大型の長胴甕(第31図6、第32図9、10)と中型の甕(第31図5、第32図8)、小型の甕(第31図7)がある。大型の甕は樽形に近い体部に短い口縁部が直線的に外傾するものである。器面はロクロナデと、体部上半または中位から下方に縦方向のケズリが施される。内面はロクロナデと縦方向のヘラナデまたはナデが施される。中型の甕は口径と器高の差があまりない短胴形の器形で、球形の体部から短い口縁が直線的に外傾するものである。器面はロクロナデとケズリが施され、内面はロクロナデとヘラナデが認められる。第31図5と第32図8は法量は異なるが器形は相似形をなしている。小形の甕は比較的長胴形のもので、器面調整は中型のものと同様である。

甔(第32図11、第33図13)

第32図11の甔は長胴形の体部に、短い口縁部、底部が付くものである。器面は全面ロクロ調整である。体部下端対角に一对の穿孔が認められる。第33図13は大型のもので、全容は不明である。

須恵器

坏(第31図2~4)

坏は口径に対する底径の比が半分前後のもので、体部が極く弱い丸味をもって外傾し、口縁部が外反気味になるものである。底部の切り離しのわかるものは回転糸切りで、底部から体部下端にかけて回転ケズリが施されるもの(第31図2)と、再調整の施されないもの(第31図3)がある。器面は内外面共に指によるロクロナデが施されている。

甕(第33図1)

体部片のみで全容はわからない。体部が大きく膨む器形のものである。体部外面はロクロナデとタクキメ、内面はロクロナデ、オサエメ、横方向のヘラナデが施されている。

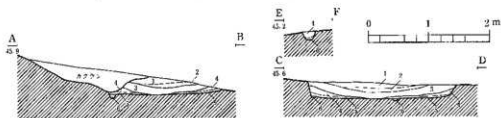
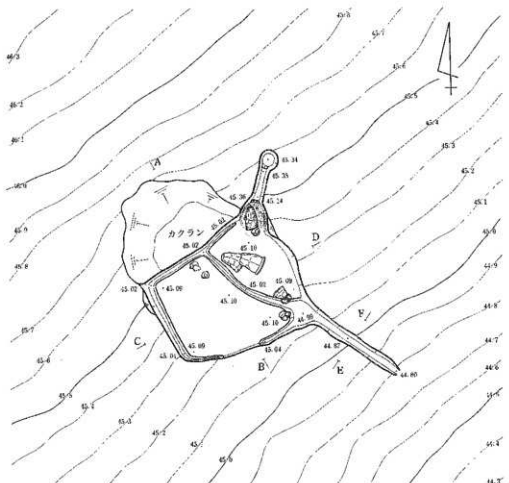
甕(第33図14)

甕同様、体部片のみで全容はわからない。比較的肩が張る器形である。器面は外面上半にロクロナデ、下半に回転ケズリが施され、内面はロクロナデと横方向を主体とするヘラナデとナデが認められる。

赤焼き土器

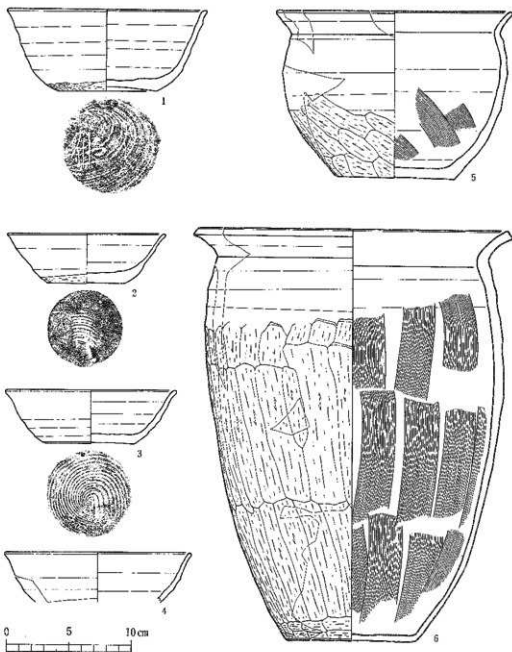
坏(第31図1)

赤焼き土器坏は口径に対する底径の比が半分前後で、器高が高い器形のもので、底部から丸



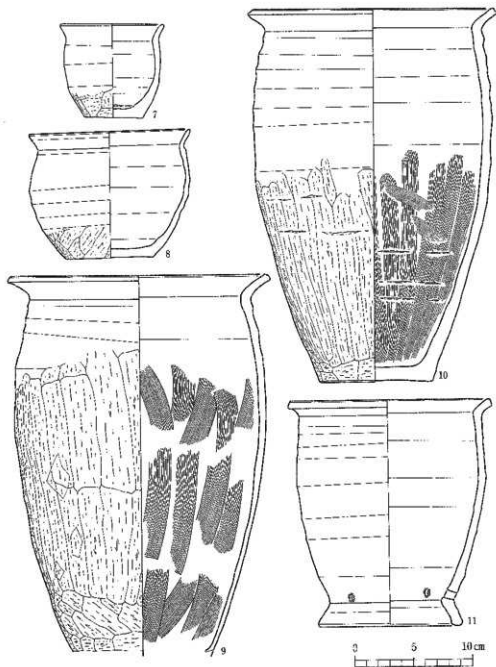
No.	土色	上層	備	考	見取断面
1	黒土 Y R 2/1	シルト	黄褐色 Y R 3/6 粘土を細かいたブロック状に含む。		第六層断面 1 枚
2	洗練層 10 Y R 8/2	シルト	灰白色火山灰層。		
3	粘層 7.5 Y R 3/1	シルト質地	少量の炭化物、粘土を含む。黄褐色 Y R 3/6 粘土を細かいたブロック状に含む。		型取層断面 2 枚
4	褐色 Y R 4/4	砂質シルト	少量の炭化物、焼土を含む。		
5	褐色 Y R 4/6	砂質シルト	少量の炭化物、焼土を含む。		型取層断面 3 枚
6	黄褐色 Y R 5/6	シルト質砂	微量の炭化物、焼土を含む。		同前

第30図 1号住居跡



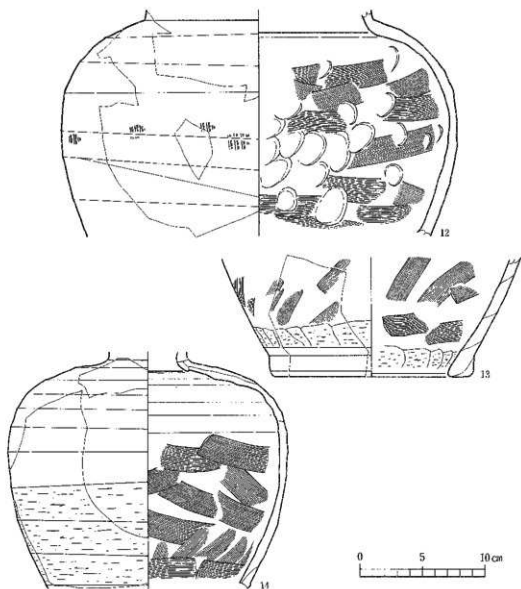
No	種別	形状	内面	外面	口	底	口径・高さ・底径(cm)	備考
1	赤褐色土器鉢	底面	ワタロナデ・滑り、底径約10Y R4/4	丸底直切	ワタロナデ、色剥れ面C付じ		16.0 × 7.9 × 6.6	区41-1号 跡1、扉面22-1
2	赤褐色土器鉢	底面	ワタロナデ・滑り、底径5Y R1/1	圓形直切・直底面	ワタロナデ、色剥れ面C付じ		12.7 × 6.2 × 4.0	跡221-3
3	赤褐色土器鉢	底面	ワタロナデ、底径2.5Y 7/1	丸底直切	ワタロナデ、色剥れ面C付じ		13.8 × 7.2 × 4.3	跡223-7
4	赤褐色土器鉢	底面	ワタロナデ、底径2.5Y 6/1		ワタロナデ、底径2.5Y 7/3		14.9 ×	
5	土器鉢	底面	ワタロナデ・滑り、底径5Y R5/6	直底面	ワタロナデ・滑り、底径7.5Y R6/6		19.8 × 5.4 × 13.5	区425-4
6	土器鉢	底面	ワタロナデ・滑り、底径7.5Y R4/3	直底面	ワタロナデ・滑り、底径7.5Y R4/3		32.6 × 10.3 × 33.9	

第31図 1号住居跡出土土器(1)



No.	種別	形状	外	内	底	口径・底径・高さ(cm)	備	考
7	土器類	カップ状	コトコナギ・縞り、透網目10Y R6/4	縞り	コトコナギ、色調内面と同一	8.8 × 5.0 × 4.0	陶器23-4	
8	土器類	浅鉢	コトコナギ・縞り、透2.5Y R6/6	縞り	コトコナギ・ヘタナギ、色調内面と同一	13.8 × 7.4 × 26.8 × 12.7	陶器23-5	
9	土器類	深鉢	コトコナギ・縞り、透2.5Y R/4	—	コトコナギ・ヘタナギ、色調内面と同一	22.2 × — × —	陶器23-5	
10	土器類	コトコナギ	コトコナギ・縞り、透2.5Y R/4	無緑彩	コトコナギ・ナギ、色調内面と同一	21.2 × 6.5 × 32.8	陶器23-8	
11	土器類	浅鉢	コトコナギ・透2.5Y R6/6	—	コトコナギ、色調内面と同一	17.4 × 12.2 × 19.3	伴器12(1)字子、無、陶器23-7	

第32図 1号住居跡出土土器(2)



№	類別	器名	形	口径	高さ	備
12	酒罎	樽	ロクロナゲ・ダマド、ネリゾウ底25G.Y.7/1	25	25	ロクロナゲ・ダマド・ヘラナゲ、底面は5Y.2/2
13	土師器	鉢	ロクロナゲ・ヘラナゲ・削り、5G.Y.7/1	10	10	ヘラナゲ・削り、底面外側と同じ
14	土師器	罎	ロクロナゲ・削り、底面5Y.7/1	25	25	ロクロナゲ・ダマド・ヘラナゲ、底面外側と同じ

第33図 1号住居跡出土土器(3)

味をもって立ち上がり、体部が直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反する。底部の切り離しは回転糸切りで切り離され、体部下端にケズリ再調整が施される。底部には「佛口」のヘラ書きがある。

3. 竪穴遺構

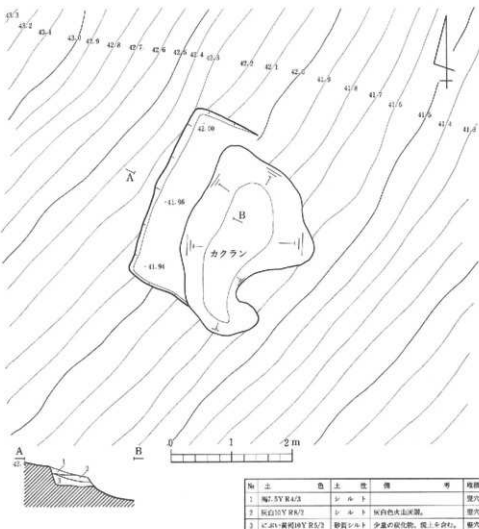
1号竪穴遺構

〔確認面〕 基本層序V層から確認された。

〔重複・増改築〕 認められない。

〔規模・平面形〕 西壁の幅3.04m、残存する北壁、南壁の幅はそれぞれ1.13m、1.18mである。南北3.04m、東西2m前後の長方形と考えられる。

〔竪穴層位〕 竪穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。



第34図 1号竪穴遺構

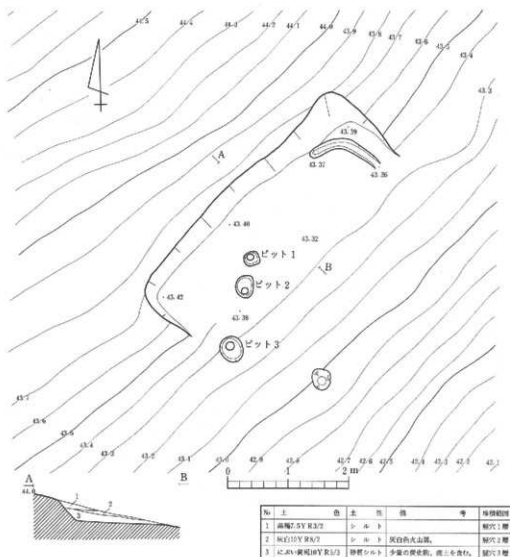
〔壁〕基本層V層からなり、最も保存の良い北西隅では、30cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序V層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは北西隅がやや高く、東へすすむにつれて低くなる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

■ 2号竪穴遺構

〔確認面〕基本層序V層から確認された。



第35図 2号竪穴遺構

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕西壁の幅4.70m、残存する北壁、南壁の幅はそれぞれ1.68m、1.15mである。南北4.70m、東西2m前後の長方形と考えられる。

〔竪穴層位〕竪穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序V層からなり、最も保存の良い北壁では41cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序V層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは南西隅がやや高く、東へすすむにつれて低くなる。

〔柱穴〕3個のピットが検出された。ピット1、2、3は掘り方と柱痕跡が区別されることから柱穴と考えられる。

〔周溝〕残存する北壁沿いにめぐる周溝が検出された。幅10～13cm、深さ3～5cm、断面は「～」形である。底面レベルは北西隅が最も高く、離れるにつれて低くなる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

4. 焼土遺構

■ 1号焼土遺構

〔確認面〕基本層序V層から確認された。

〔重複〕認められない。

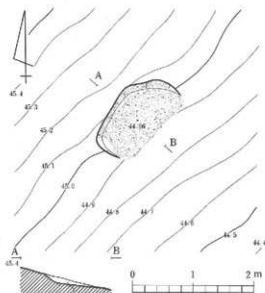
〔平面形〕長軸1.52m、短軸0.88mの隅丸長方形である。

〔竪穴層位〕1層で、自然堆積層である。

〔壁〕基本層序V層からなり、最も保存の良い西側の壁では15cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは西壁下が最も高く、東に近づくにつれて低くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。



No	土	色	土	性	備	考
1	深層IV層2/3	シロト	少量の灰化物、焼土を数珠に含む。			

第36図 1号焼土遺構

■ 2号焼土遺構

〔確認面〕 基本層序V層から確認された。

〔重複〕 認められない。

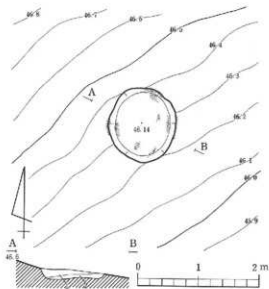
〔平面形〕 長軸1.22m、短軸1.11mのほぼ円形である。

〔竪穴層位〕 1層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序V層からなり、最も保存の良い西側の壁では19cmの高さで残存している。底面から急な角度で立上がる。

〔底面〕 基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



No	土色	土性	備考
1	黒褐色 Y R2/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。
2	黒色 Y R1.7/1	シルト	炭化物層。少量の焼土を粒状に含む。

第37図 2号焼土遺構

3号焼土遺構

〔確認面〕 基本層序V層から確認された。

〔重複〕 認められない。

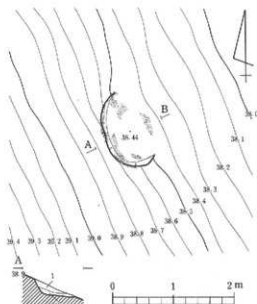
〔平面形〕 長軸1.33m、短軸0.89mの隅丸方形である。

〔竪穴層位〕 1層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序V層からなり、最も保存の良い西側の壁では26cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは西壁下が最も高く、東に近づくにつれて低くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

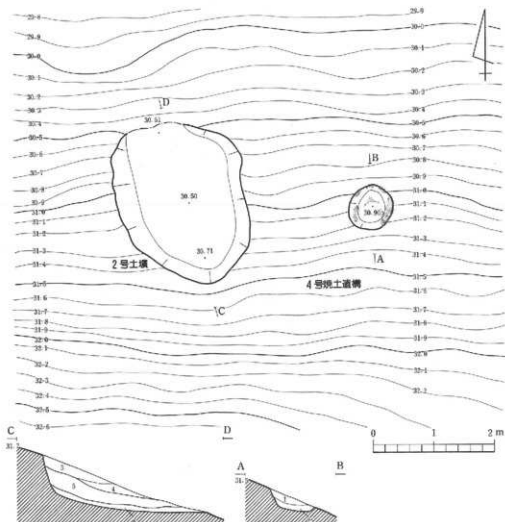
〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



No	土色	土性	備考
1	黒褐色 Y R2/3	シルト	少量の炭化物を粒状に含む。
2	黒色 Y R1.7/1	シルト	炭化物層。少量の焼土を粒状に含む。

第38図 3号焼土遺構

4号焼土遺構



No.	土色	土質	備	特徴
3	黒褐色Y R 2/3	シルト	少量の炭化物を散状に含む。	
4	淡黄褐色Y R 8/3	シルト	灰白色火山灰層。	層次1層
5	黄褐色Y R 4/6	砂質シルト		層次2層
6	暗褐色Y R 3/3	シルト質粘土	少量の炭化物、焼土を散状に含む。	層次3層

No.	土色	土質	備	特徴
1	黄褐色Y 5/6	シルト	少量の炭化物、焼土を含む。	
2	黒褐色Y R 1.7/1	シルト	炭化物層。少量の焼土を散状に含む。	

第39図 4号焼土遺構と2号土壇

〔確認面〕基本層序V層から確認された。

〔重複〕認められない。

〔平面形〕長軸0.75m、短軸0.72mの円形である。

〔竪穴層位〕1層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序V層からなり、最も保存の良い南側の壁では31cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

■ 5号焼土遺構

〔確認面〕 基本層序V層から確認された。

〔重複〕 認められない。

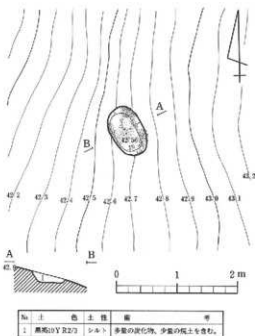
〔平面形〕 長軸0.82m、短軸0.53mの隅丸長方形である。

〔竪穴層位〕 1層で、自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序V層からなり、最も保存の良い東側の壁では21cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



第40図 5号焼土遺構

■ 6号焼土遺構

〔確認面〕 基本層序V層から確認された。

〔重複〕 認められない。

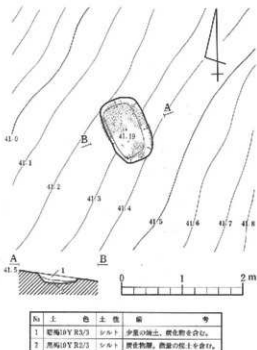
〔平面形〕 長軸1.09m、短軸0.66mの隅丸長方形である。

〔竪穴層位〕 1層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序V層からなり、最も保存の良い東南隅では22cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



第41図 6号焼土遺構

7号焼土遺構

【確認面】基本層序V層から確認された。

【重複】認められない。

【平面形】長軸1.21m、短軸0.83mの隅丸長方形である。

【竪穴層位】1層で、自然堆積層である。

【壁】基本層序V層からなり、最も保存の良い東側の壁では17cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

【底面】基本層序V層からなり、凹凸はない。低面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。



第42図 7号焼土遺構

5. 土 塚

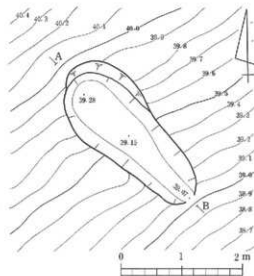
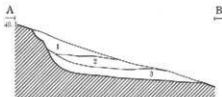
1号土塚

【確認面】基本層序V層から確認された。

【重複】認められない。

【平面形】長軸2.76m、短軸1.09mの長門形である。

No.	土色	土性	備	等
1	軽10Y R4/6	シルト質粘土	少量の炭化物、粘土を含む。	
2	浅黄緑10Y R6/3	シルト	灰白色火山灰層。	
3	軽10Y R3/3	粘 土	少量の炭化物を含む。	



第43図 1号土塚

〔竪穴層位〕 3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序V層からなり、最も保存の良い北西の壁では68cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も高く、南東にすすむにつれて低くなる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

■ 2 号 土 墳 ■ (P52、第39回)

〔確認面〕 基本層序V層から確認された。

〔重複〕 認められない。

〔平面形〕 長軸2.74m、短軸2.18mの不整階円形である。

〔竪穴層位〕 3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序V層からなり、最も保存の良い南側の壁では71cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは南壁下が最も高く、北にすすむにつれて低くなる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

■ 3 号 土 墳 ■

〔確認面〕 基本層序V層から確認された。

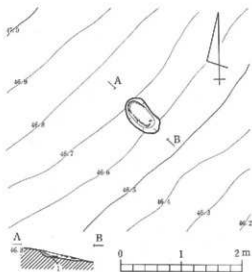
〔重複〕 認められない。

〔平面形〕 長軸0.70m、短軸0.37mの長円形である。

〔竪穴層位〕 1層で、自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序V層からなり、最も保存の良い西側の壁では12cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 基本層序V層からなり凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。



第44図 3号土墳(合口竪棺)

No.	土色	土性	備考
1	黄褐色R6	シルト	地山土、焼土、炭化物を随所に含む。

【出土遺物】底面から2cm前後上に、土師器甕の合口甕棺と考えられる土器が出土した。長胴甕と短胴甕の口縁を合わせた状況で検出されたが、遺構上部の大半が削平され、さらに根による攪乱を受け、細片となったため、実測図化できなかった。土器はいずれもロクロを使用したものである。

■ 4 号 土 塚

【確認面】基本層序V層から確認された。

【重複】認められない。

【平面形】長軸1.29m、短軸1.02mの隅丸長方形である。

【竪穴層位】1層で、自然堆積層である。

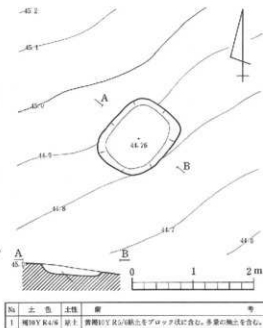
【壁】基本層序V層からなり、最も保存の良い北側の壁では21cmの高さで残存している。

底面から急な角度で立ち上がる。

【底面】基本層序V層からなり、凹凸はない。

底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。



第45図 4号土塚

■ 5 号 土 塚

【確認面】基本層序V層から確認された。

【重複】認められない。

【平面形】長軸1.08m、短軸0.88mの隅丸方形である。

【竪穴層位】1層で自然堆積層である。

【壁】基本層序V層からなり、最も保存の良い東側の壁では22cmの高さで残存している。

No.	土色	土性	備	考
1	黄褐色R4/N	粘土	黄褐色V及R6粘土をブロック状に含む。多量の礫土を含む。	



第46図 5号土塚

底面から急な角度で立ち上がる。

【底面】基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

6. 溝状遺構

1号溝状遺構 (P.12、第4図)

【確認面】発掘前、浅い溝状の窪みとして観察された。基本層序II層から確認された。

【重複】認められない。

【規模】調査区南側で、東西に走るが、中央および西端は調査区外に延びている。調査区内で検出された長さ64.8m、幅1.32～0.62mである。

【堆積土】2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。1層は暗褐10Y R3/4色シルトである。2層は明黄褐10Y R6/6粘土で、黄褐10Y R5/6粘土をブロック状に含んでいる。

【壁】基本層序II、III、V層からなり、45～25cmの深さで残存している。底面から丸味をもって立ち上がる。

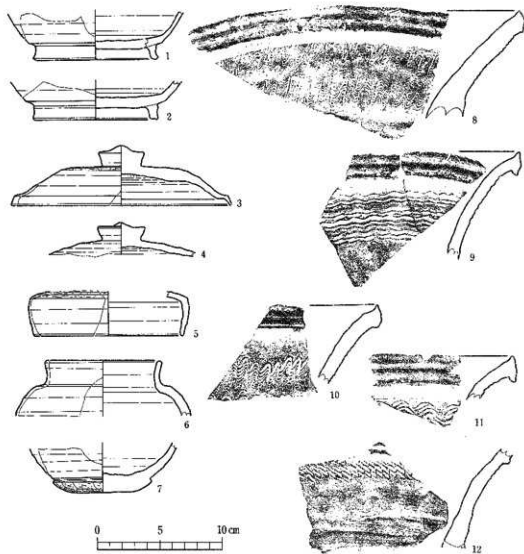
【底面】基本層序V層からなり、凹凸はない。底面レベルは、頂部から斜面に向かって低くなる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

7. I層・II層および採集遺物

今回の発掘調査ではI層、II層の除去にあたり、重機を使用したため、これに包含されていた遺物が、かなり採取できなかつたと思われる。I層、II層からは少量の縄文土器片、石器が出土しているが、細片のため図化できなかつた。縄文土器片で文様のわかるものは、波状口縁で、地文の襷糸文に沈線によるS字連続文や8字状連続文が描かれたもので、縄文時代後期前葉南境式と考えられる。石器は凸基有茎のものが2点とチップがある。出土した縄文土器と同時期のものであろう。

代官山遺跡の中でも、今回の調査区外から採集されている遺物がある。第47図の土器は今回の調査区の北方約150mの地点から採集されたものである。採集地は畑地脇で、図化した須恵器の他に天井、側壁と考えられる還元したスサ入り粘土塊が含まれており、さらに須恵器焼成時須恵器どうしが接着した破片が認められることから、付近の須恵器窯製品と考えられる。遺物は一括して採集されたもので、須恵器高台付坏、蓋、壺、器種不明のものがある。



No.	種別	部位	丹	色部	丹	型	口径・高さ・底径(cm)
1	前置器形付片	胴部	ロクロナダ、灰白N7/0	ロクロナダ	ロクロナダ、色部外側と同じ	-----	10.0*
2	深鉢蓋部付片	胴部	ロクロナダ、灰白N7/0	ロクロナダ	色部外側と同じ	-----	10.0*
3	前置器形	胴部	ロクロナダ、灰白N7/0	-----	ロクロナダ、色部外側と同じ	10.6	4.8
4	前置器蓋	胴部	ロクロナダ、灰N5/0	-----	ロクロナダ、色部外側と同じ	-----	-----
5	前置器形	胴部	ロクロナダ、灰白N7/0	-----	ロクロナダ、灰白N7/0	12.0	-----
6	前置器蓋	胴部	ロクロナダ、灰白N7/0	-----	ロクロナダ、色部外側と同じ	8.4	-----
7	前置器形付片	胴部	ロクロナダ、灰N5/0	-----	ロクロナダ、灰白N5/0	-----	-----
8	前置器形	胴部	ロクロナダ、灰状成層、灰N5/0	-----	ロクロナダ、色部外側と同じ	-----	-----
9	前置器形	胴部	ロクロナダ、灰状成層、灰N5/0	-----	ロクロナダ、色部外側と同じ	-----	-----
10	前置器形	胴部	ロクロナダ、灰状成層、灰N5/0	-----	ロクロナダ、色部外側と同じ	-----	-----
11	前置器形	胴部	ロクロナダ、灰状成層、灰N7/0	-----	ロクロナダ、色部外側と同じ	-----	-----
12	前置器形	胴部	ロクロナダ、灰状成層、灰N6/0	-----	ロクロナダ、色部外側と同じ	-----	-----

第47図 採集土器

須恵器

高台付坏 (第47図1、2)

高台付坏はいずれも口縁部を欠くもので全容のわかるものはない。平底の底部から緩い角度で立ち上がり、体部下端で稜をもって体部に至る。高台部は厚みのあるもので、稜状の変曲点から内側に直立ぎみに立つ。器面は内外面共ロクロナデが施され、底部は回転ヘラ切り後、ロクロナデが施されている。

蓋 (第47図3、4、5)

蓋には坏蓋と壺蓋がある。坏蓋は概して低平な器形で、宝珠形つまみが付き、平坦な天井部から体部が直線的に外傾するもので、口縁部は内側に短く折れ曲がる。天井部外面に回転ケズリ調整の施されるもの(3)と認められないもの(4)がある。壺蓋は口縁部から天井部が残存するもので、つまみ部を欠損している。平坦な天井部から屈曲して体部から口縁部にかけて弱い丸味をもって直立するものである。器面は内外面ロクロナデと天井部外面に回転ケズリが施される。

壺 (第47図6)

短頸壺の口縁部片である。丸い肩部から口縁部が直立するものである。器面は内外面共ロクロナデが施される。

甕 (第47図8~12)

図化し得たのは大型の甕の口縁部片である。厚手の口縁で発達した口縁部から頸部が緩く外反するものである。外面にはロクロ回転を利用した波状沈線文が描かれている。

器種不明品 (第47図7)

体部下端から底部にかけての破片である。丸底の底部から丸味をもつ体部が立ち上がるもので、底部と体部の境に沈線をもつ。底部はケズリが施され、体部は内外面共ロクロナデが施されている。

V. 遺構と遺物の検討

本遺跡の調査では須恵器窯跡2基、住居跡1軒、堅穴遺構2基、焼土遺構7基、土墳5基、溝状遺構1条の遺構が検出され、各遺構に伴って遺物が出土した。ここでは、各遺構ごとに、その特徴と編年的位置や問題点について検討する。

1. 窯跡と出土遺物

■ 1号窯跡(D A I 1窯) ■

〈遺物〉

1号窯跡(以下DAI1窯と言う)は床面が2面と、それらに対応すると考えられる灰層2枚が検出されたが、先述のとおり、連続して操業したものと考えられ、両者における相違は認められなかった。そこで、DAI1窯出土の遺物を一括の土器と考え検討を進めたい。

【遺物の特徴】

DAI1窯から出土した遺物には須志器坏、高台付坏、蓋、壺、壺、鉢、鉢の製品と焼台に使用された丸瓦がある。各器種の特徴は前項で述べているが、再度、簡単にまとめておきたい。

坏はI、II、III、IVA、IVB類の5種に分類される。底部の切り離しのわかるものは全て回転ヘラ切りで、回転ケズリ、ケズリ、軽いナデの再調整が施こされるものが多い。分類された各類の特徴は、第2表に示したとおりである。

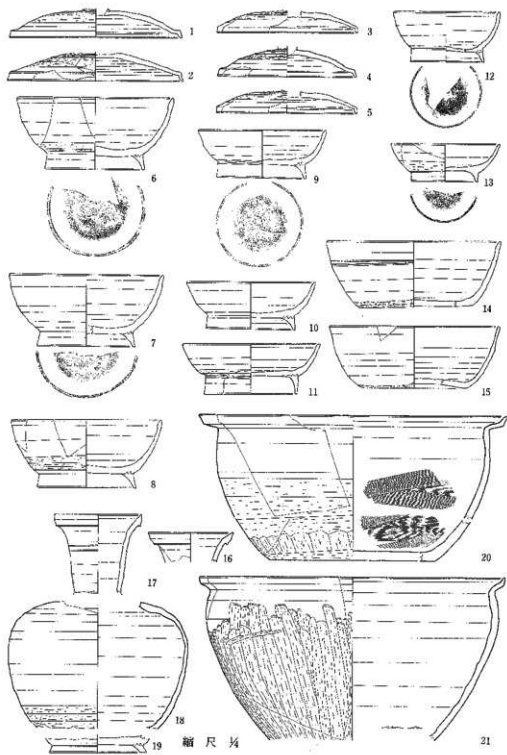
高台付坏はIA、IB、IIA、IIB、IIC、IIIA、IIIB類の3法量7種に分類された。分類された各類の特徴は第2表に示したとおりである。坏部は各類共内湾する、椀形のものである。底部切り離し後、回転ケズリ再調整を施し、高台部を付けている。高台部は坏部に比してやや高く、極く薄くつくられており、高台部端は「L」形で丸味をもたない。また、坏部と高台部の接合面には、深さ1.5~2.0mmのロクロ回転による2条の接合沈線が観察される。この接合沈線の技法は、本窯跡出土の壺にも認められるものである。また、坏部と高台部との接合部外面には、棒状工具による沈線の認められるものもある。これは接合時に密着度を高めるためか、余った粘土を削り取るためについたものと考えられる。

蓋は体部が直線的に外傾するものと、緩く内湾するものがあり、口縁端部が屈曲する。全てつまみ部を欠失している。口径から推察すると高台付坏I、II類と組み合わせると考えられる。蓋の内、外面には、重ね焼きによって赤褐色に変色している部分があり、高台付坏と組み合わせて焼成したものと考えられる。つまみの欠損部にも、接合沈線が観察された。

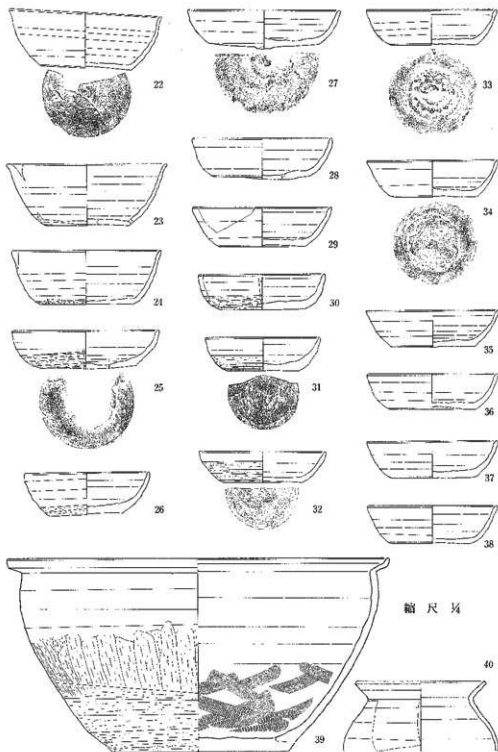
壺、壺は、全容のわかるものはない。壺は丸底、平底のものがあり、後者が主体を占める。口縁部は丁寧につくられ、ロクロ回転による波状沈線の施されるものもある。体部はロクロナ

種別	分類	法	量	形	特徴	備考
坏	I 類	口径17cm前後、器高6cm前後、底径10cm前後		体部緩く内湾、口縁部やや外反、斜唇深い		体部下半→底面全面にケズリor回転ケズリ
	II 類	口径16cm前後、器高4cm前後、底径9cm前後		体部緩く内湾、斜唇深い		体部下半→底面全面に回転ケズリ
	III 類	口径16cm前後、器高4cm前後、底径10cm前後		体部緩く内湾		
	IVA 類	口径14.5cm前後、器高4cm前後、底径9cm前後		体部緩く内湾		底部ヘラ切り→軽いナデ
	IVB 類	口径14.5cm前後、器高4cm前後、底径9cm前後		体部緩く内湾		
高台付坏	I A 類	口径17.5cm前後、器高7.5cm前後、底径13cm前後		体部が強く内湾		体部下半→底面全面に回転ケズリ 底部全面に波状沈線
	I B 類	口径14.5cm前後、器高5.5cm前後、底径9cm前後		体部が強く内湾		体部下半→底面全面に回転ケズリ 底部全面に波状沈線
	II A 類	口径12cm前後、器高4.5cm前後、底径9cm前後		体部が強く内湾		体部下半→底面全面に回転ケズリ
	II B 類	口径12cm前後、器高4.5cm前後、底径9cm前後		体部が強く内湾		体部下半→底面全面に回転ケズリ

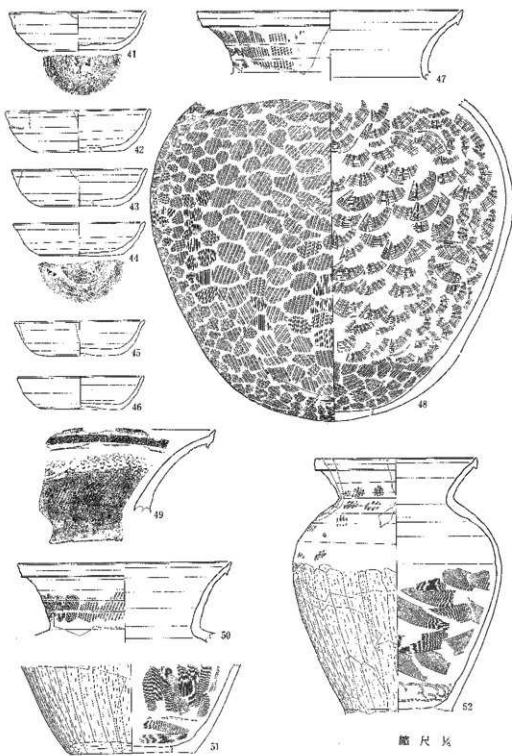
第2表 1号窯跡出土坏・高台付坏の特徴



第48圖 1号窯跡出土土器(1)



第49図 1号窯跡出土土器(2)



第50圖 ↑ 与麻器出土土器③

デ、タタキ、回転ケズリ、ケズリが並用される。壺は口頸部が細長く、口縁部は甕と同じ形態である。体部は比較的縦長で、上半にロクロナデ、下半に回転ケズリが施される。

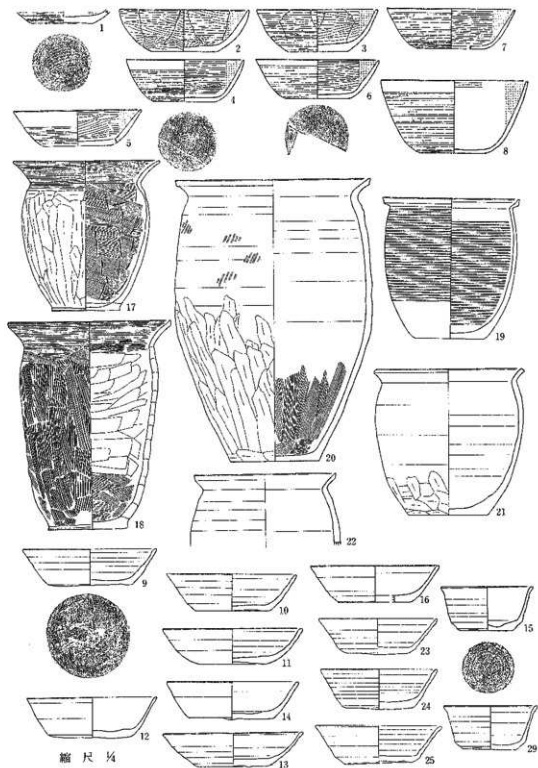
鉢は底部から緩い膨みをもって体部が外傾し、短い口縁部が受口状に広がるものである。体部外面にはロクロナデと回転ケズリまたは縦方向のケズリが施され、内面にはロクロナデとヘラナデ、ナデが認められる。

【編年的位置と問題点】

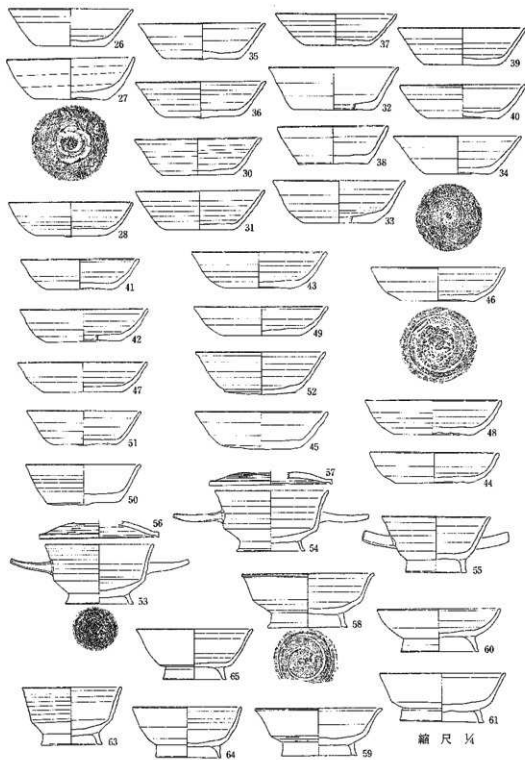
年代の検討にあたり、出土量が豊富で器形の変化の捉え易い須恵器坏、高台付坏を用い、他の遺跡出土のものと比較したい。

DA I 1 窯出土坏と類似する資料は利府町硯沢窯跡(真山悟ほか：1987. 3)から出土している。本窯出土の器高の高い腕形の坏 I 類は、硯沢窯跡 B 3 号窯灰原や B 16 号窯灰原から出土している腕 II A 類に類似するが、細部を見ると、本窯のものは底径が小さく、回転ケズリやケズリが雑で、硯沢窯跡のものよりも後出の様相を示している。坏 II 類の様な体部下半から底部全面に回転ケズリが施されるものは、硯沢窯跡 B 9 号、B 10 号窯出土坏に類似する。坏 III、IV A、IV B 類は、器形では硯沢 B 8 号、B 9 号、B 10 号窯出土坏に類似するものの、本窯のものは回転ヘラ切り後軽いナデが施される程度で、再調整の施される硯沢窯のものよりも後出する様相と考えられる。したがって、本窯は、硯沢窯跡 B 8 号、B 9 号、B 10 号窯から、それらにやや後出する年代が考えられる。

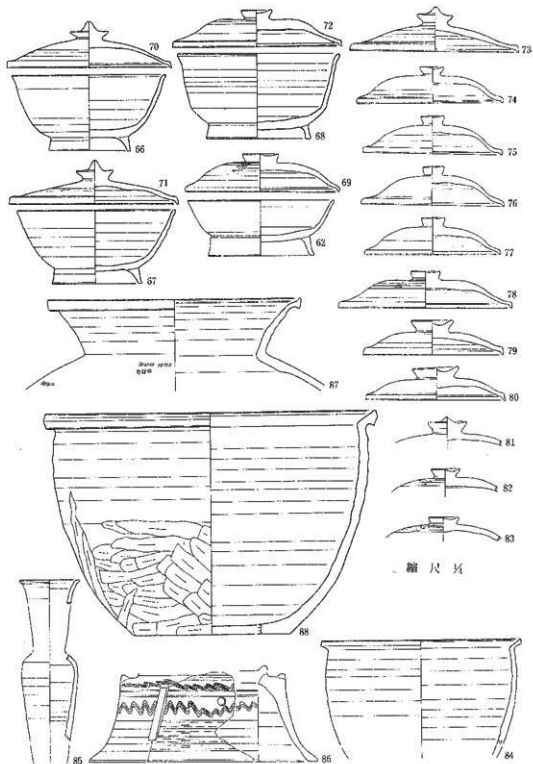
さて、本窯出土の高台付坏は強く内湾する坏部に極く薄くシャープで、比較的高い高台部が付されたもので、本窯を代表する特徴ある器形のものである。この高台付坏に近似する資料が築館町伊治城跡から出土している。伊治城跡 S I 173 住居跡(菊地逸夫：1991. 3) 出土遺物は、その出土状況が「住居が廃棄され若干の土砂の堆積が進行した後、炭化物などと共一括投棄されたもの」で、堆積上の検討や遺物間の接合関係から「ほぼ同時期の所産」と考えられるものである。さらに、出土遺物は「器形や調整などの特徴からいくつかのグループに分類」され、焼成状況や胎土の観察から同一(供給源窯)と考えられる坏 I 類、蓋 I 類・III 類、高台付坏 I A・IV A 類を注出することができるとされる。この伊治城跡 S I 173 住居跡坏 I 類、蓋 I・III 類、高台付坏 I A・IV A 類と、本窯のものを比較してみたい。S I 173 住居跡出土坏 I 類(第 51 図 11、13、第 52 図 27、42~44、46~49)は底部が回転ヘラ切り無調整で、木窯坏 IV A、IV B 類に類似するものの、器形は内湾するもので、底径がやや小さく、再調整も施されない点で本窯のものより後出の要素をもつ。蓋 I 類(第 53 図 70、71、73、81)・III 類(第 53 図 79、80)は、体部が直線的に外傾し、端部が屈曲するもので、大きめの宝珠形つまみがつくものである。本窯の蓋と近似する。本窯の蓋はつまみ部が欠損しているため不明であるが、本窯の西約 150m の地点から検出された関ノ入遺跡 11 号(S E K 11)窯出土の蓋蓋(佐藤敏幸：1993. 3ほか)のつまみも大



第51図 伊治城跡S | 173住居跡出土土器(伊治城跡:1992.3より)(1)



第52図 伊治城跡S | 173住居跡出土土器(伊治城跡: 1992. 3より) (2)



第53図 伊治城跡S | 173住居跡出土土器(伊治城跡:1992.3より)③

きめの宝珠形で、本窯の蓋のつまみを推察することができ、類似性も補強される。高台付坏 I A 類(第53図66、67)、IV A 類(第52図64)は先述のとおり、本窯に特徴的な土器である高台付坏 I B 類、III B 類に近似しており、さらに、接合沈線の技法まで同様である。^{註1}細部についてみると、S I 173住居跡出土のものは、底部が回転ヘラ切り無調整であるのに対し、本窯のものは回転ケズリ再調整が施され、その再調整が体部にまでおよぶものもあるという違いが認められる。これは、S I 173住居跡のものが本窯のものより技法の簡素化という点で後出するものと考えられる。

伊治城跡 S I 173住居跡出土遺物から注出されたまとまりである坏 I 類、蓋 I・III 類、高台付坏 I A・IV A 類は、器形・技法の検討からも近似し、DA I 1 窯に後続するものと考えられる。また、両者は同一系譜の技術による所産と考えられる。^{註2}

以上のことから、DA I 1 窯は、碓沢窯跡 B 8 号、B 9 号、B10 号窯同様もしくは後出で、伊治城跡 S I 173住居跡に先行する年代を与えることができる。碓沢窯跡 B 8 号、B 9 号、B 10 号窯は、他の窯跡との比較検討から 8 世紀中葉、または、8 世紀第 2 四半紀後半から第 3 四半期前半を中心とする頃(村田晃一：1992. 8)と考えられており、伊治城跡 S I 173住居跡出土土器は、胆沢城跡や伴出した「壺 G」との比較から 8 世紀末から 9 世紀初頭の年代を与えている。したがって、DA I 1 窯は 8 世紀第 3 四半紀を中心とする年代を考えておきたい。

さて、本窯の上限を探る資料に焼台として使用された丸瓦がある。全容のわかるものはないが、破片を総合して考えると、無段の丸瓦で、凸面に縄甲き目、凹面に布目を残すもので、粘土紐巻き作りのものである。この丸瓦と同様の瓦は、国府多賀城から出土した瓦に類例は認められない。本遺跡の北方約 1 km に位置する須江瓦山窯跡から出土しており、供給先は、牡鹿郡衙あるいは牡鹿柵跡に擬定されている矢本町赤井遺跡と考えられている。このことは、宮城県内のこの時期の瓦窯が、多賀城と瓦窯周辺の城柵・官衙両方に供給していることから考えれば特異な窯跡群といえる。逆に牡鹿郡に供給されていることから考えれば、本窯跡群と直接、密接な関係を認めることができる。いずれにせよ、本窯の上限年代は、この丸瓦を生産した窯跡や供給地の調査が進めば、さらに限定されるものと考えられる。

次に、高台付坏と壺にみられた高台部接合面の接合沈線について触れておきたい。高台部におけるロクロ回転を利用した同心円状接合沈線の技法は、陶器窯での須恵器定型化以後の TK 208 型式以後に高坏において観察されている(田辺昭三：1966. 4、菱田哲郎：1992. 12)。「この同心円状の接合沈線は、地方窯の製品でも見ることができ、工人の系譜を捉える属性としてみることができる。本窯出土のもので観察して以後、他遺跡出土の遺物についても観察するよう心がけているが、工具の違いこそあれ、少なからず他の遺跡のものにも観察することができた。しかし、宮城県内のものでは本窯のものほど明確な沈線をもつものではなく、本窯の特徴と

して捉えることが可能である。今後、この属性の観察から工人の技術系譜、あるいは生産地と消費地を特定することができる指標となる可能性をもっている。^{註3}

〈遺構〉

DAI1窯は全長6.14m、焼成部、燃焼部からなる半地下式窯である。窯跡周囲には窯跡を囲むように外周溝が巡る。東北地方の窯形態の変遷は地下式から半地下式へ変化するとされ、近年の須江窯跡群の調査から9世紀後半には地下式も再度出現することがわかってきている。

DAI1窯の所在する須江窯跡群内では、DAI1窯を含めて8世紀中葉から半地下式窯の構造に始まり、それらに後続するSEK11、SEK12、SEK24窯の8世紀末～9世紀前半まで続く。その後、9世紀中葉以降にはDAI2窯に代表される地下式窯に変化していく。本窯で検出された外周溝も、DAI1窯～SEK24窯の半地下式窯段階までは明確で深い外周溝が付設されるが、9世紀後半の地下式窯段階では不明確で浅いものに変化し、付設されなくなる。この外周溝の施設は、祝瓦窯跡A4号、A5号、A6号、A8号窯の半地下式の瓦窯や、仙台市安養寺下窯跡(渡邊泰伸：1992.3ほか)の半地下式窯からも検出されている。その性格は、窯体内に雨水の流入を防ぐ排水施設と考えられる。

次に、天井部構築材痕について触れておきたい。天井部構築材は、岩山町合戦原窯跡(宮城県多賀城跡調査研究所：1986.3)や、仙台市五本松窯跡(小川淳一：1987.3)から検出されている。DAI1窯の側壁外から検出された天井構築材とその痕跡は、他の検出例同様、半地下式窯の天井部構築の際に、アーチ状の骨組みにスサ入り粘土を貼り付けて天井部を構築したことを実証するものである。須江窯跡群内では地下式窯であるSEK2窯(中野・佐藤：1990.3)からも検出されており、半地下式にかぎらず地下式窯でも、窯詰め後、焚口部を構築するものと考えられる。

註1：築館町教育委員会の御好意により実見させていただき、宮城県教育庁文化財保護課菊地逸夫氏、築館町教育委員会千葉良彦氏には有益な御教示をいただいた。

註2：DAI1窯と伊治城跡SI173住居跡出土の須江器坪I類、産I・I類、高台付坪I・IVA類の具体的なつながりは明確ではないが、いくつかのケースを想定することができる。ひとつは、DAI1窯の工人が、時間を過ぎて技法の簡素化に至りながら、須江窯跡群内で生産し、伊治城へ運ばれた可能性。あるいは、DAI1窯の工人が須江窯跡群を離れて他の地域で生産し、伊治城へ運ばれた可能性。または、DAI1窯と同じ系譜の工人が他の地域から来て、生産した可能性などである。いずれにせよ、その検証は、窯跡の発見を待たなければならないであろう。

註3：須江窯跡群内でも、DAI1窯に顕著に見られた接合沈線は、それに後出するSEK11窯のものには全く認められないという事実がある。このことは、本窯跡群全ての製品にこの技法が認められるものではないと同時に、一定期間見られた技法といえる。本窯跡群の場合は、SEK11窯は、DAI1窯と異なる技術系譜によるものと考えている(佐藤敏幸：1993.3)。

■ 2号窯跡(D A I 2 窯)

〈遺物〉

2号窯跡(以下D A I 2 窯と言う)からは床面が2面と灰層1枚が検出されたが、先述のとおり、連続して操業されたものと考えられ、各床面から出土した遺物の特徴に差違は認められなかった。そこで、D A I 2 窯出土の遺物を一括の土器と考え検討を進めたい。

【遺物の特徴】

D A I 2 窯から出土した遺物には須恵器坏、甕、壺がある。各器種の特徴は前項で述べているが、再度、簡単にまとめておきたい。

坏は碗形的一种である。体部全体が弱い丸味をもって外傾するもので、口縁部が外反するものと、しないものがある。底部は回転糸切りで切り離され、再調整は施されない。器面調整は、外面に指によるロクロナデ、内面にコチ状工具によるロクロナデが観察される。口径13.4~16.0cm(平均14.9cm)、底径5.4~8.0cm(平均6.7cm)、器高3.9~5.2cm(平均4.4cm)を計る。口径に対する底径の比は1:0.45で、口径に対する器高の比は1:0.30である。

甕は出土量が少なく、全容のわかるものは少ない。底部は平底で、体部は球形に近い丸味をもつもので、短い口縁部が、直線的に外傾する。口唇部は折り曲げられ、つくりも丁寧であるが、比較的小さく、単純化している。器面は口縁部から体部中位までロクロナデ、下半に縦方向のケズリが施され、前工程のタタキメも観察される。内面は上半にロクロナデ、下半に横方向と縦方向のナデが施されている。口縁部に連続山形沈線文の見られるものもある。

壺も全容のわかるものはない。口縁部は短かめで、頸部から口縁にかけて緩やかに外反する。体部はナデ冪の球形で、底部にはしっかりと外側にふんばる高台が付く。器面は体部中位より上にロクロナデ、下半にケズリとタタキメが残る。内面はロクロナデが全域に施される。高台部は底縁端屈曲点に付されており、接合面には角柱状の棒状工具による刺突を施し、凹凸をつくり、接着を強化している。接合刺突ともいうべき技法である。

【編年の位置と問題点】

遺物の検討にあたり、各器種毎に他の遺跡と簡単に比較してみたい。

D A I 2 窯出土坏と同様の、底部の切り離しが回転糸切りで無調整の須恵器坏を焼成した窯跡としては、須江窯跡群内では須江糠塚遺跡第1窯(NUK 1 窯)・第6窯(NUK 6 窯)(高橋・阿部:1987.3)、関ノ入遺跡1号(SEK 1)窯・2号(SEK 2)窯・3号(SEK 3)窯(中野・佐藤:1990.3)などがある。須江窯跡群以外では、仙台市五木松窯跡(小川淳一:1987.3)が知られている。また、仙台市安養寺中洞窯跡(東北学院大学考古学研究所:1967.7、村田晃一:1988.3)からは、底部の切り離しが回転糸切りで、ケズリ再調整の施される坏が出土している。

まず、DA12窯の所在する須江窯跡群内から検出された窯跡と簡単に比較してみたい。須江窯跡群から検出された、底部の切り離しが回転糸切りで無調整の須恵器環を焼成した窯跡は、須江雑塚遺跡報文の検討を捉まえ、関ノ入遺跡概報では、

SEK2窯→SEK3窯・NUK6窯→SEK1窯→NUK1窯
(概ね、9C.後半) (10C.前半)

という変遷を推定した。

SEK2窯の環は、体部が直線的に外傾する逆台形状のものと、強い丸味をもつ碗形のものの2種に分かれる。口縁部がわずかに外反するものもあるが、数は少ない。体部には粘土紐の痕跡が認められる。内外面に指による緩いロクロ目が観察される。法量は口径13.7～15.3cm(平均14.4cm)、底径5.8～7.4cm(平均6.5cm)、器高4.1～5.0cm(平均4.6cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.45、口径と器高の比は平均で1:0.32である。

SEK3窯の環は、体部がやや直線的に外傾する逆台形に近い器形のもの、緩やかな丸味をもち、口縁部が外反する碗形のものがあるが、2種に分類するほど明確ではない。外面は指によるロクロナデ、内面は全面にコテ状工具によるシャープなロクロ目が観察される。法量は口径13.6～15.1cm(平均14.6cm)、底径5.4～6.6cm(平均6.0cm)、器高3.9～4.9cm(平均4.4cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.41、口径と器高の比は平均で1:0.30である。

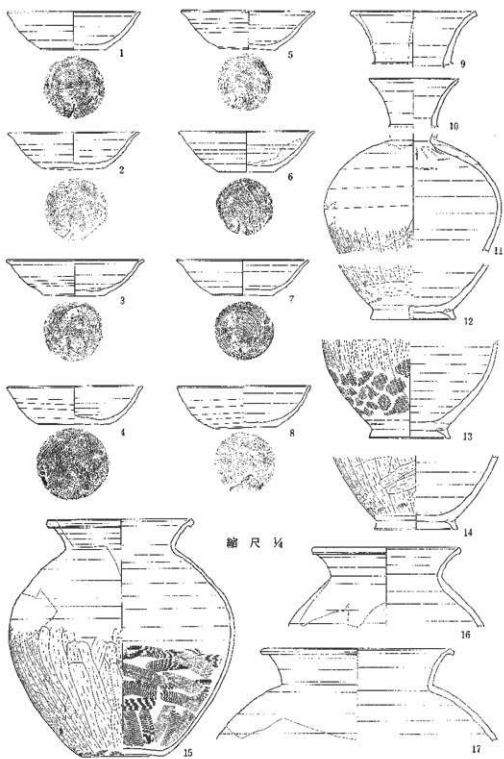
NUK6窯の環は、体部が内湾気味が外傾するもの1種である。第1次、第2次床面のものにはコテ状工具が使用されている。法量は口径14.3～15.5cm(平均15.0cm)、底径5.3～7.2cm(平均6.1cm)、器高3.9～5.6cm(平均4.7cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.41、口径と器高の比は平均で1:0.31である。

SEK1窯の環は、体部が極く弱い丸味をもって外傾し、口縁部が外反するもの1種である。法量は口径15.2～16.3cm(平均15.7cm)、底径5.4～6.5cm(平均5.9cm)、器高3.8～5.2cm(平均4.6cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.38、口径と器高の比は平均で1:0.30である。

NUK1窯の環は、体部が弱い丸味をもって外傾し、口縁部が外反するもの1種である。器内面にはコテ状工具痕跡が認められる。口径13.7～15.9cm(平均14.8cm)、底径4.5～5.9cm(平均5.2cm)、器高3.9～5.6cm(平均4.4cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.35、口径と器高の比は平均で1:0.30である。

窯	形	口径	底径	器高	口径:底径	口径:器高	内面のコテ状工具痕跡
DA12窯	強い丸味をもって外傾	14.3cm	6.2cm	4.4cm	1:0.43	1:0.30	有
SEK1窯	極く弱い丸味をもって外傾。口縁部外反	15.7cm	5.9cm	4.6cm	1:0.38	1:0.30	有
SEK2窯	逆台形状のものと丸味をもつ碗形の2種	14.4cm	6.5cm	4.6cm	1:0.45	1:0.32	有
SEK3窯	逆台形に近いものと丸味のもの(あいまい)	14.6cm	6.0cm	4.4cm	1:0.41	1:0.30	有
NUK1窯	強い丸味をもって外傾。口縁部外反	15.0cm	5.3cm	4.4cm	1:0.35	1:0.30	有
NUK6窯	内湾気味が外傾	15.0cm	6.1cm	4.7cm	1:0.41	1:0.31	有

第3表 須江窯跡群の須恵器窯出土環



第54図 2号窯跡出土土器

以上の窯跡の出土坪についてまとめたものが第3表である。

DAI 2窯の坯は、椀形の坯1種で、器形ではNUK 6窯やSEK 3窯の椀形の坯に類似している。法量では、口径・器高比はいずれの窯も1:0.30前後と差はないが、口径・底径比は、1:0.35~0.45の間にばらつきを見せている。DAI 2窯の口径・底径比は1:0.45で、上記の窯の中では最も大きく、SEK 2窯と同じ値を示している。DAI 2窯にも認められたコテ状工具痕は、SEK 3窯以降の坯に認められるものである。以上の類似点を考えると、DAI 2窯の坯は、底径がやや大きく古い要素をもつものの、SEK 3窯やNUK 6窯と類似し、同様の年代が考えられる。SEK 3窯やNUK 6窯の年代は、多賀城IV期の瓦を生産した仙台市五本松窯や安養寺中開窯との検討から9世紀後半の年代が考えられている。

ところで、須江窯跡群では前述の窯跡を含めて、約30基の窯跡が調査されている。須江窯の変遷過程は、大まかには各地で相似た様相を示すものの、具体的には技術的系譜の違いや地域性によって異なるものと考えられる。今後、須江窯跡群の須江窯変遷がまとめられると思うが、その段階で、再度、他地域(窯跡群)の遺物や変遷過程と比較検討されることになろう。現時点では、DAI 2窯の年代を概ね、SEK 3窯・NUK 6窯の年代と同様の9世紀後半と考えておきたい。

〈遺 構〉

DAI 2窯は、全長7.10m、煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる地下式窯である。焼成部は長さ3.20m、幅1.22mの、小規模の窯である。須江窯跡群の窯構造は、9世紀後半のSEK 2窯以降、地下式窯となる。硯沢窯跡にみられた8世紀中葉の地下式窯と比較すると、DAI 2窯は、急斜面の地形を利用し、工人1人がようやく這って入る程浅く、狭く、小規模なもので、高化度、高温を求めため、地形を利用して床面の角度を急にした窯構造の単純化、簡素化ともいえる。

DAI 2窯は須江窯焼成および窯出し後に廃棄されたもので、窯詰の状況は詳細には不明であるが、残された遺物の出土状況から推察することができる。遺物の大半は坯が占めており、甕や壺は少ない。出土位置は、原位置を保っていないものの、焚口部付近に甕、壺があり、焼成部中位から窯尻までは坯のみが出土していることから、焚口部に近いところから中型品、窯尻に進むにつれて小型品の坯が配されたものと推察される。坯は、床面に口縁部を一部欠いた坯を伏せた状態で突き刺し焼台とし、その上に数個の坯を伏せて重ね置くという窯詰方法を行っている。この窯詰方法はSEK 2窯以降、須江窯跡群終末段階のSEK 16窯まで継続されている。なお、窯詰の具体的状況は、関ノ入遺跡住宅団地造成区域から検出されたSEK 20窯の検出状況が理解し易い。今後刊行される報文を参照されたい。

2. 住居跡と出土遺物

■ 1号住居跡 ■■■■■■

〈遺物〉

【出土遺物の特徴】

1号住居跡の床面、カマド底面から土師器甕、甔、須恵器環、壺、赤焼き土器環が、堆積土から須恵器甕が出土している。

土師器甕は、大型の甕と中型の甕、小形の甕がある。大型の長胴甕は樽形に近い体部に短い口縁部が直線的に外傾するものである。器面はロクロナデと、体部上半または中位から下方に縦方向のケズリが施される。内面はロクロナデと縦方向のヘラナデまたはナデが施される。中型の甕は口径と器高の差のあまりない短胴形の器形で、球形の体部から短い口縁部が直線的に外傾するものである。器面はロクロナデとケズリが施され、内面はロクロナデとヘラナデが認められる。小型の甕は比較的長胴形のもので、器面調整は中型のものと同様である。

甔は大型のものと中型のものがあり、大型のものは底部破片で全容は不明である。中型のものは長胴形の体部に、「く」字状に屈曲する短い口縁部と底部が付くものである。体部下端対角に一对の穿孔が認められる。

須恵器環は口径に対する底径の比が半分前後のもので、体部が極く弱い丸味をもって外傾する逆台形状で、口縁部が外反気味になるものである。底部は回転系切りで切り離され、底部から体部下端にかけて回転ケズリが施されるものと、再調整の施されないものがある。

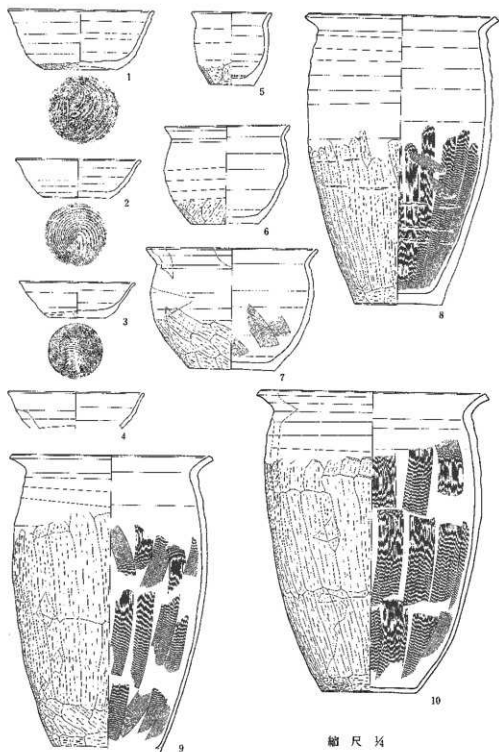
壺は体部破片で全容はわからないが、体部が大きく膨む器形のものである。外面はロクロナデとタタキメ、内面はロクロナデ、オサエメ、横方向のヘラナデが施されている。

壺も体部破片で全容はわからないが、比較的肩が張る器形である。器面は外面上半にロクロナデ、下半に回転ケズリが施され、内面にはロクロナデと横方向を主体とするヘラナデとナデが認められる。

赤焼き土器環は器高の高い器形のもので、底部から丸味をもって立ち上がり、体部が直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反する。口径に対する底径の比は半分前後である。底部の切り離しは回転系切りで切り離され、体部下端にケズリ再調整が施される。底部には「佛□」のヘラ書きがある。

【編年の位置と問題点】

東北地方南部における古代の土器研究は、出土量が豊富でその形態変化の捉え易い土師器環を中心に進められてきた。1号住居跡からは土師器環が伴出していないことから、その検討は



縮尺 ¼

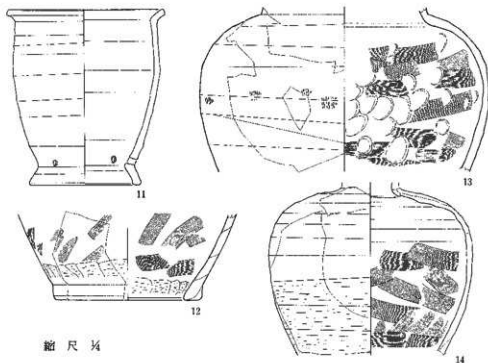
第55図 1号住居跡出土土器(1)

できない。そこで、伴出した須恵器坏、壺、土師器甕、甗、赤焼き土器坏の組み合わせから、類例を求め、比較検討してみたい。

1号住居の出土土器に類似する資料を出土した遺跡には、本遺跡に隣接する関ノ入遺跡10号住居跡(中野・佐藤:1990.3)、色麻町上新田遺跡(小井川和夫:1981.3)第1、第8号住居跡、亙理町宮前遺跡(丹羽茂:1983.3)第20号住居跡、名取市今熊野遺跡(丹羽茂:1985.3)K S第13号住居跡がある。

関ノ入遺跡10号住居跡(第57図)はロクロ使用の土師器坏、甕、ロクロ不使用の鉢、須恵器坏、甕、双耳壺から構成される。1号住居跡のものと比較すると、須恵器坏では器形、製作技法、調整共に同様で強い類似性が認められる。土師器甕では、器形、製作技法が異り、ロクロ不使用の土師器甕、鉢を伴う関ノ入遺跡10号住居跡が古い要素を持つものとも考えられる。関ノ入遺跡10号住居跡は、SEK11窯や他の遺跡との類似性から9世紀初頭頃の年代に訂正された(佐藤敏幸:1993.3)。

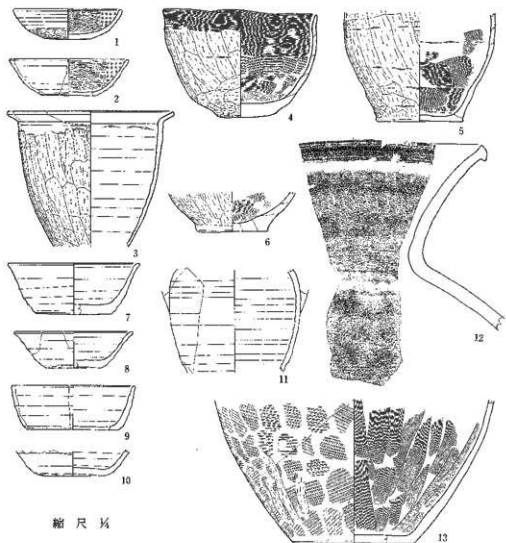
上新田遺跡第1、第8号住居跡は、土師器坏、高台付皿、蓋、甕、須恵器坏、稜碗、蓋、赤焼き土器坏、蓋、鉢で構成される。須恵器坏は体部が直線的に外傾するもので、底部の切り離しは回転糸切り、ヘラ切り、手持ちケズリ再調整の施されるものがある。回転糸切りやケズリ再調整の施されるものは器形、製作技法、調整技法共に類似する。土師器甕でも長胴形のもの



第56図 1号住居跡出土土器(2)

や中型の甕は、1号住居跡のものに類似している。上新田遺跡第1、第8号住居跡出土土器は表杉ノ入式(氏家和典：1957. 3)でも古い段階に位置付けられるものの、土師器の製作集団が須恵器工人と密接な関係にあるか、あるいは須恵器工人そのもの(小井川和夫：前掲)とされ、遺跡の性格からすれば、本遺跡に近いものと言える。

宮前遺跡20号住居跡は土師器坏、蓋、甕、須恵器坏、蓋、高台付坏、甕からなる。須恵器坏は底部から内湾して立ち上がり、体部が直線的に外傾するもので、回転糸切り、ヘラ切り、回転ケズリの施されるものがある。回転糸切り、回転ケズリの施されるものは類似している。土師器甕も長胴形のは1号住居跡のものに類似する。宮前遺跡20号住居跡は土師器坏の検討



第57図 関ノ入遺跡10号住居跡出土土器(中野・佐藤：1990. 3より)

から8世紀末から9世紀初頭の年代が与えられている。

今熊野遺跡K S 13号住居跡は土師器坏、甕、須恵器坏、甕、盤、蓋転用碗がある。須恵器坏は1号住居跡のものに類似している。今熊野遺跡K S 13号住居跡は、平安時代初期の年代が与えられている。

以上、各遺跡の特徴と類似点を羅列した。その内容をまとめて考えると、表杉ノ入式でも古い段階の、8世紀末～9C初頭の年代が考えられる。

次に、器種ごとに触れてみたい。1号住居跡から出土した須恵器坏、甕、壺に類似する資料は、窯跡では隣接する関ノ入遺跡11号(S E K 11)窯跡(佐藤敏幸：1991. 2、1992. 2、1993. 3、村田晃一：1992. 8)から出土している。S E K 11窯は須恵器坏、双耳坏、蓋、甕、長頸壺、短頸壺、鉢から構成される。1号住居跡出土須恵器は、器形、製作技法、調整技法、法量、胎土、色調の全てに関してS E K 11窯と同様であるところから、S E K 11窯もしくはS E K 11窯段階の窯製品と考えられる。

1号住居跡からは、ロクロ土師器の甕が出土している。ロクロ土師器の甕は圏内では出土例を知らないことから、検討することができなかった。この甕の器形に類似するものは、須恵器製ではあるが、多賀城市市川橋遺跡(石川俊英：1990. 3)水田跡194から出土しているが、口縁部形態や体部中位の突帯の有無等、異なる点も多い。この甕の器形は、関東地方の須恵器甕に類似する。関東地方では8世紀代に土師器甕が減少し、須恵器甕が再出現して増大するとされる(外山政子：1987. 3)。1号住居跡出土の甕は、須恵器甕を模倣した可能性が考えられる。甕の有無は、当時期の食生活に関する重要な問題を含んでおり、今後の出土例を待って再検討したい。

最後に、赤焼き土師器底部に記されたヘラ書文字について触れておきたい。同転糸切りで切り離された底部には、「佛□」の2文字が記されている。この「佛」の文字は、隣接する関ノ入遺跡(佐藤敏幸：1993. 3)49号住居跡出土の須恵器蓋に墨書されたものがある。この関ノ入遺跡49号住居跡を含む第5群土器は、土師器多口瓶(壺)や、須恵器鉄鉢の仏器が出土しており、土器の特徴も1号住居跡と同様で、ほぼ同時期の所産と考えられる。これら土器の出土から、一般集落というよりは、特殊な性格を伴った集落と考えられる。

〈遺 構〉

1号住居跡は、南北2.16～1.48m、東西2.51mのやや台形状の長方形を呈する竪穴住居跡で、カマド、周溝、外延溝が付設された、極く小規模な住居跡である。調査区の大部分が急斜面という地形的条件もあるが、約11,300㎡という広い調査面積にもかかわらず、検出されたのは1軒のみという、やや不自然な状況にある。竪穴住居跡も極く小規模で、隣接する関ノ入遺跡から検出された49軒の住居跡と比較しても、極めて小規模といえる。出土遺物を見ても、ヘラ書き文字のある土器を出土するなど、特殊な性格を伴う住居跡と考えられる。

3. その他の遺構と出土遺物

今回の調査からは、先述した須恵器窯2基、竪穴住居跡1軒の他に、竪穴遺構2基、焼土遺構7基、土壇5基、溝状遺構1条が検出されている。これらの遺構について簡単にまとめておくことにする。

■ 竪 穴 遺 構 ■

竪穴遺構は、2基共に北半が残存するもので、全容は不明である。この竪穴遺構に類似する遺構は、須江窯跡群内から検出されている。須江鎌塚遺跡(高橋・阿部：1987.3)では第1、第2、第3竪穴状遺構の3基が検出されているが、年代、性格共に不明である。関ノ入遺跡では7基の竪穴遺構が検出されており、形態、規模共に類似しているが、須江鎌塚遺跡同様、性格は不明である。以上の竪穴遺構は、堆積土に10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰が含まれることから、概ね、古代のものと考えられる。

■ 焼 土 遺 構 ■

焼土遺構は、7基検出されている。平面形は大部分、隅丸の正方形、または長方形を基本とするものである。堆積土はいずれも自然流入土であるが、その初期堆積土には炭化物や焼土が含まれている。この種の遺構は宮城県内の多くの遺跡から検出されている。とりわけ、隣接する関ノ入遺跡からは98基の焼土遺構が検出されているものの、その性格については未だに明確ではない。

■ 土 壇 ■

土壇は、5基検出されている。これらの大半は焼土遺構同様、その性格について不明なものである。由一、遺物の出土した3号土壇は、摩滅が著しく細片化していたため実測図化できなかったが、ロクロ土師器壺の合口壜棺墓と考えられる。

■ 溝 状 遺 構 ■

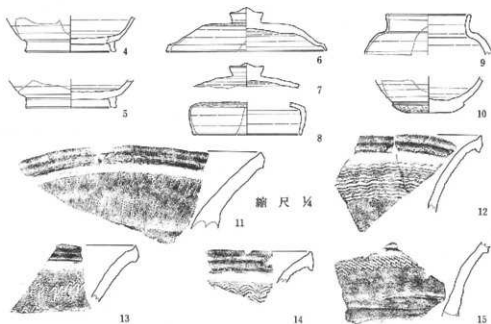
溝状遺構は、調査区南側に1条検出された。遺物は出土しておらず、その年代、性格については不明である。堆積土の状況から見ると、地山崩落土の含まれる初期堆積土と、草木の腐蝕土と思われる自然堆積土からなり、他の遺構とは全く異なるものである。発掘調査以前の踏査段階から窺みとして観察されたこの溝状遺構は積極的根拠はないが、比較的新しい年代のものではないかと思われる。

採集土器

今回の調査区の北方約150mの地点から一括して採集された須恵器について触れたい。採集された須恵器は、高台付坏、坏蓋、壺蓋、短頸壺、甕、器種不明須恵器があり、窯の側壁あるいは天井土と考えられる多量のスサ入り粘土塊と共に採集された。

高台付坏はいずれも口縁部が欠失するものである。体部下端で強く屈曲し、体部が直線的に外傾するもので、屈曲点からやや内側に厚めの高台部がしっかりと付されている。底部は高台付着時のロクロナダが全面に認められ、切り離し技法は不明である。坏蓋は弱い丸味をもった天井部に直線的な体部が外傾し、口縁が内側に屈曲するもので、バランスのとれた大きさの宝珠形つまみが付されている。天井部外面は回転ケズリの施されるものと認められないものがある。壺蓋は天井部から口縁部にかけて残存するものである。回転ケズリの施された天井部から屈曲して、丸味をもった口縁部が直立する。短頸壺は口縁部片で、やや外反気味に直立する口縁から頸部が屈曲するものである。甕は口縁部の破片のみである。いずれも厚みのある丁寧なつくりの口縁で、ロクロ回転を利用した波状沈線が施されている。

以上の土器は、焼成も良好で、丁寧に成形されている。これらの土器をDAI1窯と比較しても、各器種共異なる特徴をもっている。須恵器坏が欠落していることから、その検討ができないが、各器種の特徴から考えれば、色麻町口の出山窯跡群(岡田茂弘ほか：1970.3)や利府町



4～15：DAI0窯(採集)

第58図 DAI0窯採集土器

磯沢窯跡B9号、B10号窯と同時期の8世紀中葉～後半にかけての年代が考えられ、DAI1窯に先行する段階のものと考えられる。本資料は採集品という資料的に弱い面をもつものの、スサ入粘土と共に採集されていることから窯跡一括品の可能性が強いと考えられる。これらを一括の土器と仮定し、未だその窯跡は検出されていないが、代官山遺跡0(ゼロ)号窯(DAI0窯)と称し、DAI1窯に先行するものとして位置付けて置きたい。

VI. ま と め

1. 代官山遺跡は、石巻海岸平野に位置する独立丘陵、通称須江丘陵の南部東端に位置している。須江丘陵は、丘陵の各地から瓦・須恵器の窯跡が発見されており、全体を窯跡群として捉えることができ、これを須江窯跡群と称する。代官山遺跡はこの須江窯跡群内に所在している。今回の調査では、奈良時代～平安時代の須恵器窯2基、住居跡1軒、時期は限定できないが、竪穴遺構2基、焼土遺構7基、土壌5基、溝状遺構1条と細文土器、石器が検出され、また、別地点からは窯跡出土と考えられる土器が採集された。
2. 1号窯跡(DAI1窯)は、急斜面に構築された半地下式穴窯で、窯の囲りには排水施設と考えられる外延溝が巡らされている。DAI1窯の製品には、須恵器坏、高台付坏、蓋、甕、壺、鉢があり、焼台には丸瓦片が転用されている。その年代は、8世紀第3四半紀を中心とする年代が考えられる。

DAI1窯製品の供給先は、現在のところ不明であるが、器形・技法共に近似する須恵器が栗原郡築館町伊治城跡から出土している。その伊治城跡出土の上器は、「V. 遺構と遺物の検討」の項で述べたように、同一の技術系譜の所産で、技法の簡素化からDAI1窯に後続するものと考えられる。このことから、須江窯跡群と、その北西約39km離れた伊治城との密接な関係が予想される。須江窯跡群は、位置と生産された瓦の供給関係から、奈良時代には古代牡鹿郡に属していたものと考えられる。生産された瓦が、陸奥国府多賀城に供給されていないことから考えれば、律令制のもと、牡鹿郡を中心に供給することを目的とした、一郡一窯的な位置づけを想定させる。「続日本紀」によれば、牡鹿郡では天平勝宝5年(753)、牡鹿郡人丸子牛麻呂、豊島ら24人が牡鹿連の姓を賜わり、その後、天平神護1年(765)牡鹿宿禰島足が道島宿禰の姓を賜わっている。この道島氏一族はその後、大國造となるなど、陸奥国でも有数の豪族となる。古代牡鹿郡や道島氏については、三宅宗謙氏の論(三宅宗謙：1973.5ほか)に詳しい。伊治城造営にも道島氏が積極的に関与しており、牡鹿郡と伊治城の関係も密接なものと考えられ、宝龜11年(780)伊治君持麻呂の反乱で牡鹿郡大領道島大橋が殺害されていることから伊治城と牡鹿郡の関係の深さを認めることができる。伊治城への須江窯跡群の製品もしくは工人(技術)の供給あるいは移入があっても不思議ではない。

- 逆に、DAI1窯は社鹿郡や道島氏を背景に操業されたものと考えられることができる。
- 2号窯跡(DAI2窯)は、急斜面に構築された小規模な地下式常窯である。製品には須恵器坏、甕、甕がある。その年代は概ね、9世紀後半が考えられる。
 - 1号住居跡は、小規模な竪穴住居跡で、出土した遺物の特徴から8世紀末～9世紀初頭の年代が考えられる。出土した土器の中には、ロクロ土師器甕や、「佛」のへら書きされた赤焼き土器坏があり、注目される。
 - 須恵器生産に関しては、須江窯跡群内で既に調査が実施されている30余基の窯跡と合わせて、今後、総合的な検討が必要となるものである。

引用文献

- 伊東信雄(1967.3)：「古代史」『宮城原史』第1巻 宮城県
 石川俊英(1990.3)：「市川橋遺跡—平成元年発掘調査報告書—」『多賀城市文化財調査報告書』第21集
 多賀城市埋蔵文化財調査センター
 氏家和典(1957.3)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
 岡田茂弘ほか(1970.3)：「日の出山窯跡群—埋蔵文化財緊急調査概報—」『宮城原文化財調査報告書』第22集
 宮城県教育委員会
 小川洋一(1987.3)：「五本松窯跡—都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書—」
 『仙台市文化財調査報告書』第99集 仙台市教育委員会
 小川・竹原(1990.6)：『新版標準土色帖』10版 日本色研事業株式会社
 菊地逸夫(1991.3)：「伊治城跡」『築館町文化財調査報告書』第4集 築館町教育委員会
 小井川和夫(1981.3)：「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集 宮城県教育委員会
 佐藤敏幸(1991.2)：「須江窯跡群の概要」『第17回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
 古代城柵官衙遺跡検討会
 (1991.3)：「御山蔵場跡—発掘調査報告書—」『河南町文化財調査報告書』第5集 河南町教育委員会
 (1992.2)：「須江窯跡群奥ノ入遺跡、代官山遺跡」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
 古代城柵官衙遺跡検討会
 (1993.3)：「須江窯跡群奥ノ入遺跡—陸奥海道地方最大の須恵器生産地—」『河南町文化財調査報告書』
 第7集 河南町教育委員会
 佐藤雄一(1986.11)：「6枚碑」『わがまち河南の文化財』 河南町教育委員会
 志間・桑月(1991.11)：「宝ヶ峯遺跡」『財団法人斎藤報恩会編 財団法人斎藤報恩会
 清水東四郎(1924.12)：「中山棚址(佳景山)(桃生郡史跡)」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書』2
 庄司恵一(1991.3)：「御堂蔵守斎藤家文書について」『河南町文化財調査報告書』第5集 河南町教育委員会
 鈴木省三(1924.12)：「中山棚」『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書』1
 外山政子(1987.3)：「甕について—平安時代の甕を中心に—」『研究紀要』4
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 高橋・阿部(1987.3)：「須江窯跡遺跡」『河南町文化財調査報告書』第1集 河南町教育委員会

- 滝沢・神戸・久保ほか(1984. 3)：「石巻地域の地質」『地域地質研究報告』通商産業省工業技術院地質調査所
 田辺昭三(1966. 4)：「陶器古窯址群Ⅰ」『研究論集』第10号 平安学園
 東北学院大学考古学研究所(1976. 7)：「安養寺中區瓦窯跡発掘調査報告」『温故』特集号
 中野・佐藤(1990. 3)：「須江間ノ入遺跡—工業団地造成に伴う発掘調査概報—」『河南町文化財調査報告書』第
 4集 河南町教育委員会
 丹羽茂(1983. 3)：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集 宮城県教育委員会
 (1985. 3)：「今熊野遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第104集 宮城県教育委員会
 菱田哲郎(1992. 12)：「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会
 藤沼・小井川ほか(1989. 3)：「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25 東北歴史資料館
 松本彦七郎(1919. 5)：「陸前国宝ヶ峯遺跡の分層的な発掘成績」『人類学雑誌』34の5
 松本彦七郎(1919. 9)：「宝ヶ峯遺跡について」『考古学雑誌』第9巻第9号
 真山悟ほか(1987. 3)：「祝沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第116集 宮城県教育委員会
 宮城県教育委員会(1988. 1)：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第125集 宮城県教育委員会
 三宅宗謙(1973. 5)：「第二編古代」『矢本町史』第1巻 矢本町
 三宅・進藤・茂木(1987. 3)：「赤井遺跡第1次発掘調査報告」『矢本町文化財調査報告書』第1集
 矢本町教育委員会
 宮城県多賀城跡調査研究所(1986. 3)：「III. 合戦原瓦跡の調査」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第11冊
 宮城県多賀城跡調査研究所
 村田晃一(1988. 3)：「宮城県黒川郡大衡窯跡群」『東北歴史資料館研究紀要』第14巻 東北歴史資料館
 (1992. 8)：「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸
 問題』人ノ古窯跡群検討会
 渡邊泰伸(1992. 3)：「仙台市安養寺下窯跡—第5・6次調査概報」『仙台育英学園高等学校研究紀要』7 仙台
 育英学園高等学校

写 真 图 版



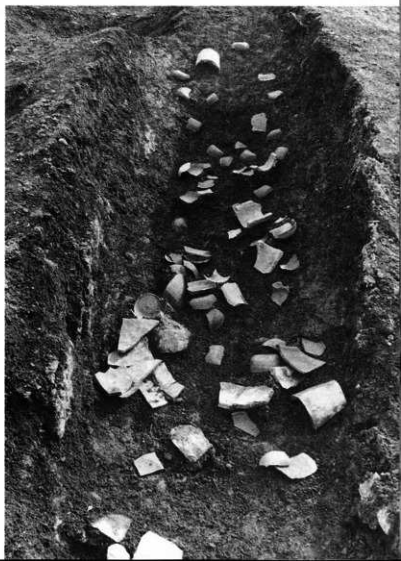
表土除去作業



1号窟跡確認状況



1号窯跡



1号窯跡



1号灰坑





1号窯跡側壁天井加工材



图版 4

1号窯跡側壁天井加工材

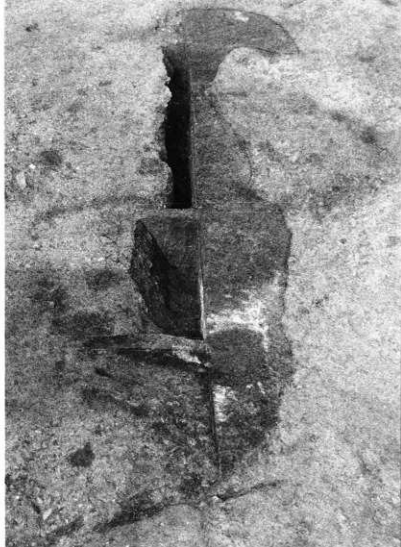


1号窯跡側壁天井加工材



2号窯跡確認状況

2号窯跡確認状況



图版 6

2号窯跡灰原





2号窟跡

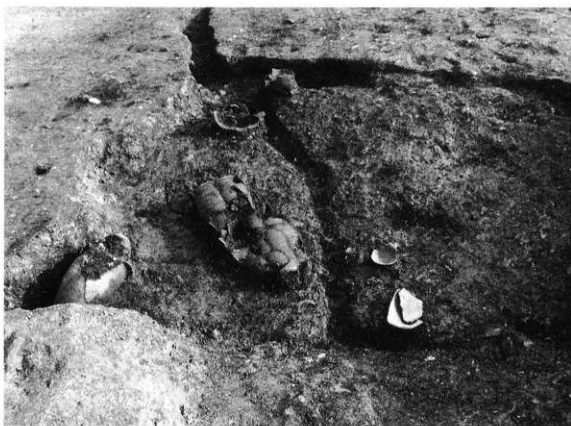
图版 7



2号窟跡灰原



1号住居跡



図版 8

1号住居跡



1号住居跡



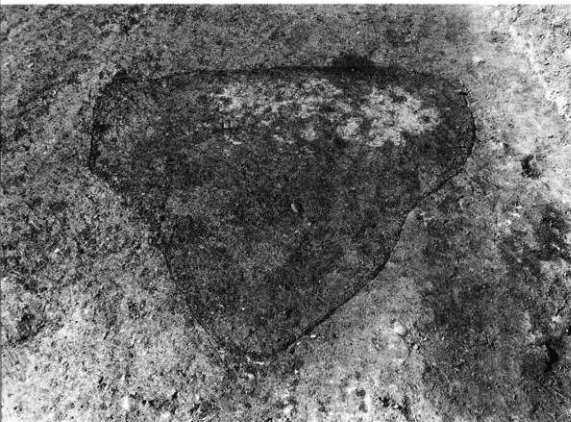


1号住居跡



图版 10

1号住居跡



1号竖穴遺構確認状況

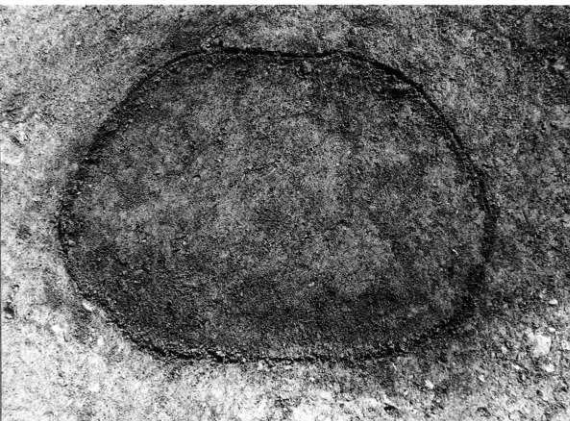


1号竖穴遺構推積土

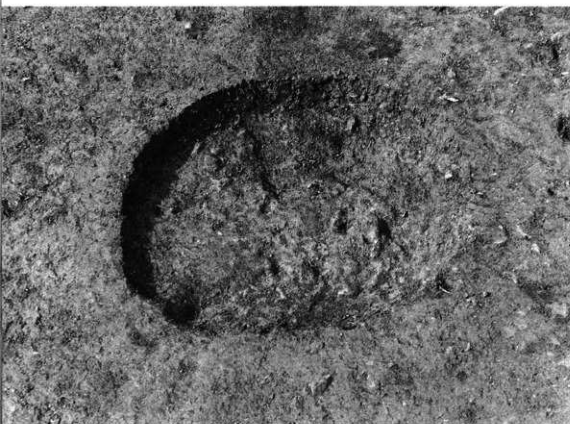


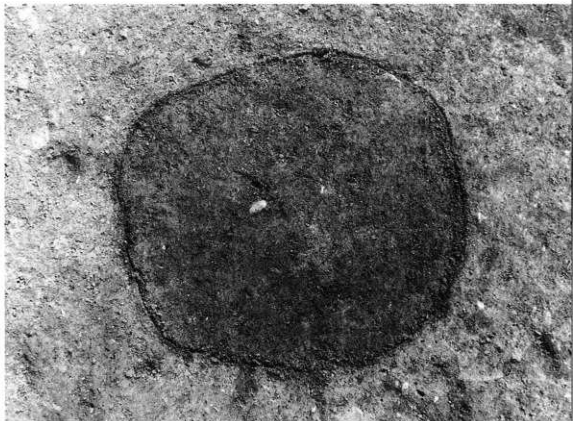
1号整穴遺構



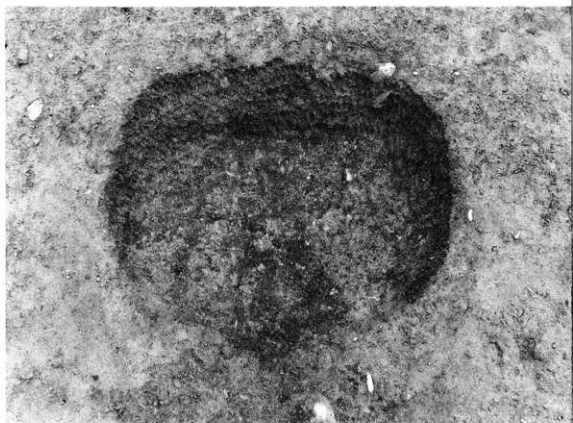


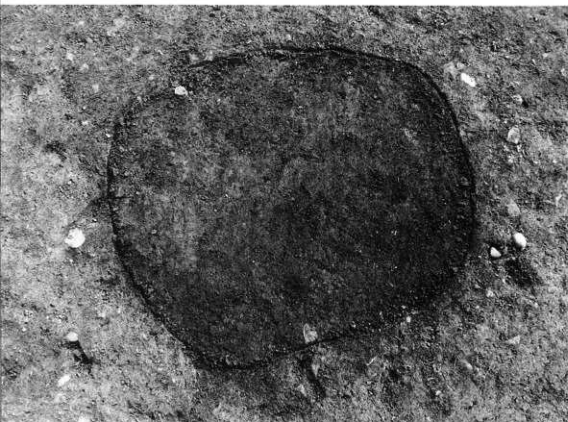
1号烧土遺構確認状況





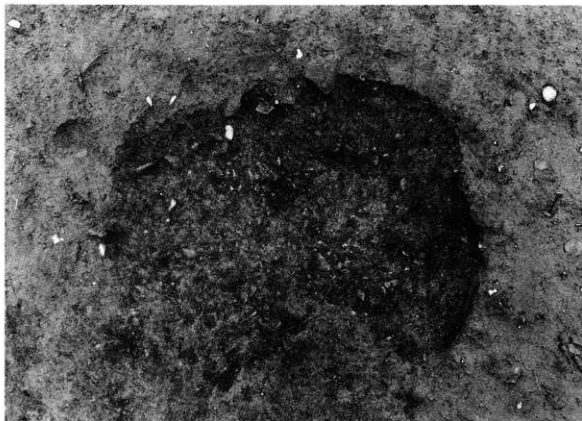
2号烧土遺構確認状況





3号烧土遺構確認状況





4号烧土遺構



5号烧土遺構



3号土坑（合口墓棺墓）



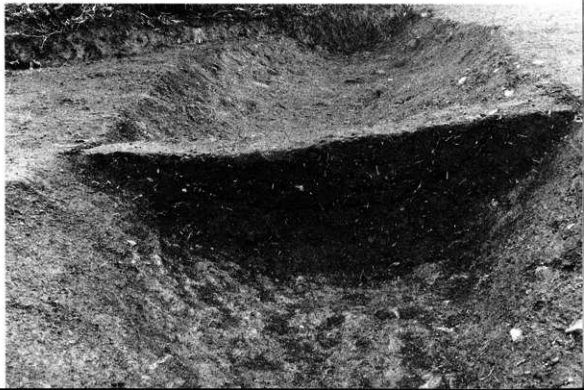
1号土坑罐破状况

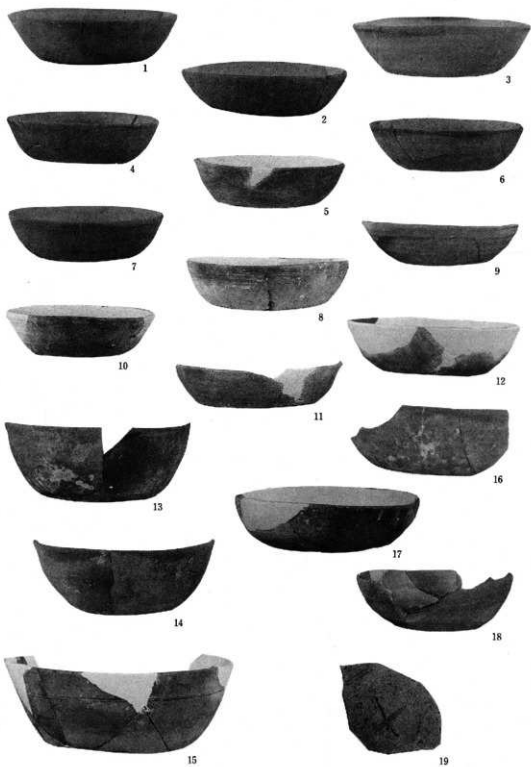
1号土壤



图 版 18

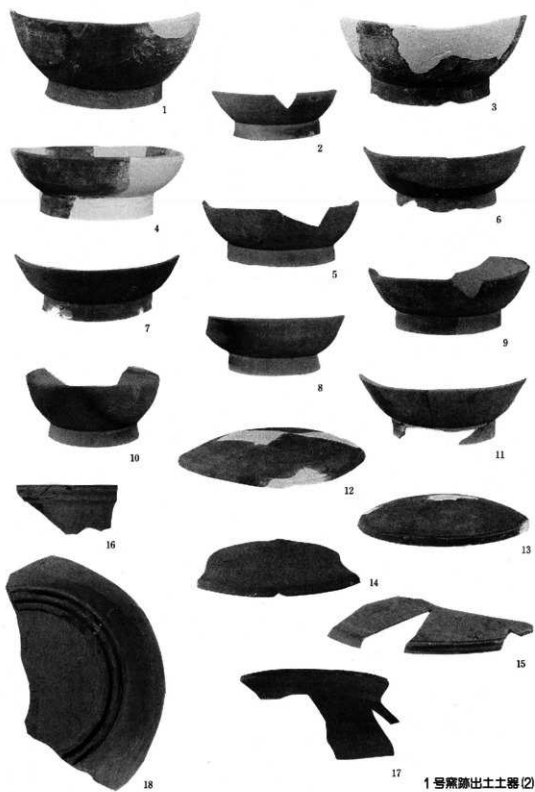
1号沟状选样





1号窯跡出土土器(1)

图版 19



1号窯跡出土土器(2)

图版 20



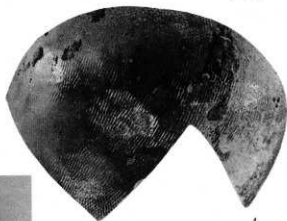
1



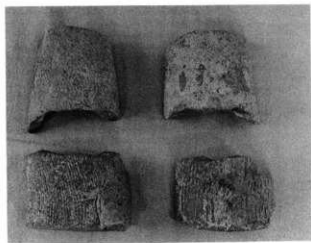
2



3



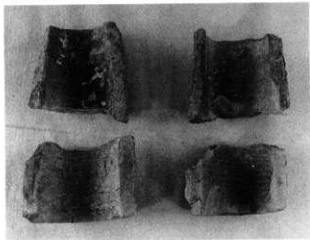
4



7 a



5



7 b



6

1号窯跡出土土器(3)

图版 21



2号窯跡出土土器



「佛口」のヘラ書き

1号住居跡出土土器

図版 23



通称 今井の塔



河南町文化財関係出版物

「わがまち河南の文化財」昭和61年11月 P. 1～201

「河南町文化財調査報告書」第1集「須江塚塚遺跡」昭和63年3月 P. 1～110

「河南町文化財調査報告書」第2集「須江関ノ入遺跡詳細分布調査報告書」昭和63年3月 P. 1～27

「河南町文化財調査報告書」第3集「須江関ノ入遺跡詳細分布調査Ⅱ」平成元年3月 P. 1～25

「河南町文化財調査報告書」第4集「須江関ノ入遺跡—工業団地造成に伴う発掘調査概報」平成2年3月 P. 1～67

「河南町文化財調査報告書」第5集「御塩蔵場跡—発掘調査報告書—」平成3年3月 P. 1～21

「河南町文化財調査報告書」第6集「須江宮跡群代官山遺跡—奈良、平安時代の須恵器生産遺跡—」平成5年3月 P. 1～108

河南町文化財調査報告書 第6集

須江宮跡群

代官山遺跡

— 奈良、平安時代の須恵器生産遺跡 —

平成5年3月18日 印刷

平成5年3月19日 発行

発行 河南町教育委員会

〒987-11 宮城県石巻市河南町新井地蔵121

TEL. 0225(72)2111

印刷 株式会社 鈴木印刷所

〒986 宮城県石巻市法正寺新井地蔵121

TEL. 0225(22)41010



1号住居跡出土土器